

討論 港町の原像－中世野原と讃岐の港町－

片桐孝浩・佐藤竜馬・松本和彦・上野進（四国村落遺跡研究会）

I. シンポジウムの経緯

2007年10月20・21日の2日間にわたり、香川県歴史博物館（当時、現・香川県立ミュージアム）講堂において、シンポジウム「港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－」が行われた。この時期に同館で開催されていた展示「海に開かれた都市」（香川県歴史博物館・香川県埋蔵文化財センター共催）に合わせた企画であり、展示担当者（松本・上野）を含めたメンバーからなる四国村落遺跡研究会（代表・片桐）が主催した。なお、シンポジウムは、財団法人福武学術文化振興財団の助成（2006年度瀬戸内海文化研究・活動支援助成C）を受けて行われた。

1990年代から、香川県埋蔵文化財センターと高松市教育委員会が進めてきた高松市街地（高松城跡）の発掘調査により、実態が不明であった中世港町・野原を考える遺構や遺物が数多く見出されるようになってきた。また発掘成果を踏まえて改めて文献史料を見ると、そこに再認識・再検討すべき価値をもつ素材が多く存在することに気付かされた。考古学・文献史学の両面から、中世港町・野原のイメージを構築し提示することを、シンポジウムの課題に据えた。当日の構成と発表内容は、以下のとおりである。

問題提起（片桐）

第1部 野原という「場」とその構成

野原の景観と地域構造（松本）

港町をめぐる寺社と領主（上野 進）

漁撈集団と港町（乗松）

第2部 野原を取り巻く海域世界

古・高松湾と瀬戸内世界（渋谷啓一）

石造物の流通（松田朝由）

中世港町の地形と空間構成（北山健一郎）

第3部 中世都市から近世都市へ

初期高松城下町の在地的要素（佐藤）

記念講演

中世港町研究の現状と課題（市村高男）

コメント

高松城跡の発掘成果から（大嶋和則）

土器研究の観点から（佐藤亜聖）

経済史の観点から（井上正夫）

「都市」と「地域」からの視点（伊藤裕偉）

討論（司会 片桐・佐藤）

当日は、県内外の研究者や歴史に関心をもつ一般市民など、合わせて約120名の参加を得た。各発表の大半については、『港町の原像』上下巻（岩田書院）として刊行される運びとなっており、詳細はそちら

を参照されたい（上巻は2009年刊行）。同書では、討論については収録されていないが、内容的に重要な議論が展開されているため、本紀要で掲載するものである。

討論は、予定時間を1時間以上も超過した、3時間あまりの長丁場となった。考古学・文献史学を問わず、シンポジウムでの討論は、「言い放し」に終わることが多い。しかし、「とりあえずやってみた」シンポにはしたくなかった。幸い、2006年に行われた中世都市研究会三重大会が、刺激的なよき手本として、強い印象を残してくれた。四国村落遺跡研究会では、それに学びつつ準備作業を進めることができた。討論を進める上での基本的なスタンスは、このシンポによって情報発信を担うべき地域の発表者がイメージを語り、それをコメンテーターがすくい上げ、広げるというものであった。従来の讃岐の中世史研究（文献・考古）とは違う視点で、既存資料を取り扱い、再評価していくことを心がけた。地域発表者は、時にコメンテーターに喰われてしまうこともあったが、それぞれの枠の中に閉じこもらない、積極的な発言が見られたことは特筆されよう。なお文字化にあたり、発表者で所用のため討論を欠席していた乗松のコメントを付け加えている。

遺漏を恐れるため御名前を記さないが、シンポジウムの構想・準備から実施に至るまで、多くの方の御教示・御協力・御参加があったことを明記し、改めて深甚なる感謝を申し上げたい。

II. 討論「港町の原像」

討論の参加者とスタッフは、以下のとおりである（いずれも所属は当時、五十音順）。

司会 片桐孝浩（香川県教育委員会）・佐藤竜馬（香川県観光交流局）
討論参加者 市村高男（高知大学）・伊藤裕偉（三重県教育委員会）・井上正夫（香川県医務国保課）・上野 進（香川県歴史博物館）・大嶋和則（高松市教育委員会）・佐藤亜聖（元興寺文化財研究所）・柴田龍司（千葉県教育振興財団）・渋谷啓一（香川県観光交流局）・鋤柄俊夫（同志社大学）・鈴木康之（広島県立歴史博物館）・松田朝由（大川広域行政組合）・松本和彦（香川県歴史博物館）・綿貫友子（大阪教育大学）
会場スタッフ 小野秀幸（香川県歴史博物館）・海邊博史（善通寺市議会事務局）

■1 見えてきた中世野原のイメージ

片桐 それでは、時間がまいりましたので、最後の討論ということになります。各先生から発表していただいたことを、できるだけまとめるように務めてまいりますので、よろしくお願いします。コメンテーターや発表者の方々と、活発な議論をしたいと思います。それと、会場とのやりとりもできればいいかなと思っておりますので、よろしくお願いします。

まず、討論に入る前に、時間の都合で会場を発たれる鋤柄さんに一言いただければ、と思います。鋤柄さんとは、四国村落遺跡研究会を立ち上げた当初から、常に関係をもっていただいて、市村先生と同様、アドバイザー的に研究会を盛り上げていただいています。このシンポジウムについて、感想をお聞かせいただけますでしょうか。

鋤柄 今ご紹介いただいた鋤柄でございます。この研究会には、当初からいろいろ参加させていただいています。市村先生もおっしゃってましたけど、とにかく今日来られた皆さん、同じお気持ちだと思いますけれども、とにかく現場に基づいて、地域からいろいろなことを発信する。そのためには、たくさん歩いて、たくさん汗をかいて、酒を飲まなければいけない、という趣旨に賛同いたしましたので、何回も四国内を歩かせていただきましたが、今回のシンポジウムはまさにそうした活動の結実したものとして、とても勉強になりました。ありがとうございました。

感想ということで、一言だけ述べさせていただきます。仕事の都合で昨日は来られなかったのですが、資料集を見せていただきましたら、野原の原景観の一つの大きなモニュメントに、石清尾八幡宮がある、という風に書かれています。それと瓦器碗との関係ということに、松本さんが触れている。瓦器碗の意味と、それから流通・分布というものについて、私も非常に興味をもっているテーマです。かつて、その背景に石清水八幡宮が深く関わっていたのではないかと、ということを書いたことがございます。今回、そうした私の仮説に合致するようなかたちで、こちらの野原の風景を描くことができるのではないかと、ということで、心強く感じた次第です。

ただ、瓦器碗そのものが商品であるか、あるいはどういう使われ方をしたのかということについては、まだいろいろ詰めなければならないこともあるかと思えます。その点については触れませんが、従来検討対象としてのモノだけではなくて、今回取り上げられたように場所があって、伊藤さんが言われたように、それに関わる様々な人々の動きというものがある。そうしたことが地域を出発点とした研究会から、中身のある形として、深みのある形として、どんどん立ち上がっていくことが重要だと考えます。是非、これからもこういった動きをがんばって進めていただければ、という風に思います。ありがとうございました。

片桐 ありがとうございました。貴重なご意見をいただきました。それでは討論ということで、こちらの方でシナリオを用意しておりますので、それに沿ってやっていきたいと思えます。

どうでしょうか皆さん、イメージ先行ということを昨日から佐藤が言っているわけですが、「中世港町・野原」というイメージが見えてきたでしょうか。まずもう一度、野原のイメージ、中世の野原がどのような状況だったか、ということを確認していこうかと思えます。

それに関しては、発表者の松本さんとか大嶋さんとか上野さんを含めて、野原というのがどのような景観だったかということが示されました。そこでまず、松本さんの方からもう1回、考古学の立場から復元図を踏まえてお話しください。

松本 大雑把な話をしますけれど、第1・2図をご覧ください。第1図が12世紀から13世紀前葉の景観復元です。そこで16・17とした部分に港湾施設がある。さらに6に港湾施設がある。おそらくは両方とも河道の河口部に港があったという状況が復元できる。さらに集落がそれに隣接しない、つまり港町が形成されていないという景観があります。その背後には、先ほど鋤柄さんがおっしゃっていた15の石清尾八幡宮が、海浜部ではなくて奥側にあるといった景観が想定できる。

そして13世紀後半から高松築城直前の段階を示した第2図をご覧くださいなのですが、中世前半と比べるとかなり地形が安定してきた。この段階で、港湾施設は明確には確認できていないのですけれども、1の浜ノ町遺跡ですね、非常に都市的な生活を取り入れた集落になりますけれども、それが砂堆3・4・1で形成された潟がある内湾状の地形に面したところにある。この遺跡自体は13世紀末から形

成されるということなのですが、そういった港に隣接する集落が出てくる。東の方の6・7も同じ状況かと思われます。13世紀末から14世紀に「港町」と呼ばれるものが、港の近くに形成されていく。それに相まって、11の無量寿院のようにたくさんのお寺が進出してくる、というような景観があります。15の摺鉢谷川の背後に、石清尾八幡宮が控えているという状況になります。



第1図 12～13世紀前半の野原復元図（松本作成）



第2図 13世紀後半～16世紀後半の野原復元図（松本作成）

片桐 次に上野さんの方から、文献史学の立場からお話してください。

上野 報告でもお話ししたように、野原の内陸側に隣接する坂田を含めて諸寺院があります。古代にはむ

しる坂田の方に寺院があり、それが次第に野原の方へ移っていくというような傾向があります。平安時代後期から室町時代前期にかけて、真言宗のお寺とかが集まり出します。それから市村先生も言われていましたが、宗教者の動向としては熊野信仰が阿波とか讃岐に広がりをもってきている。ただそれは、全国的な傾向にも合致していることで、戦国期くらいになると衰退していき、16世紀ぐらいから伊勢の御師がやって来る。

特徴的なのは、一向宗のような海から入ってくる宗派が、野原の海浜部にかなり勢力をもって来るように思います。日蓮宗とか、宇多津などで見られるような他の宗派がないというのも、どういう意味があるのか、改めて考える必要がありますけれど、大きくはそういった形で野原に寺院などが集中的に集まり出すという傾向は見取れるのではないかと思います。

佐藤 今、お二方が考古学と文献史学の立場から語ってくれました。

松本さんのお話しは、2つに要約できます。①12世紀前半から港湾施設はあるけれども、集落が近くにないこと。それから②13世紀の後半から港湾に近接して集落が形成されて、港町として始まるということですが、そこでは都市的な生活があること。

上野さんのお話しでは、13世紀以降に真言宗や熊野信仰が浸透して行って、16世紀には一向宗や伊勢信仰が入ってくるということですね。

2日間の議論では余り取り上げられませんでした。16世紀中葉に書かれた『さぬきの道者一円日記』には、野原中黒とか野原浜・野原西浜・野原天満・野原中ノ村などの地域単位が分立しています。それから「古・高松湾」という高松平野に大きく湾入している海があり、その西側に野原、東側には高松郷・方本があるということを渋谷さんが話されました。そこでは一直線の動きではないものの、古代から中世を通して次第に高松郷・方本から野原の方へ地域の中心機能が移ってくるということですね。そして野原に建設された近世高松城下町では、中世的な要素が引きずられていくというようなことが分かってきました。

■ 2 野原における「場」の構成

(1) 問題提起 1～構成単位の問題

佐藤 そうしたことを確認した上で、議論を進めていこうと思います。最近の港町研究については、市村先生の御講演と、伊藤さんのコメントからうかがえましたが、それを前提にしながら港町としての野原がどんな「場」だったのかということ、内部の構成などを中心に考えたいと思います。また、伊藤さんがコメントされたように、「地域」には様々なレベルがあるということですが、いろいろなレベルの中で野原や讃岐の位置とか役割とかを考えたいと思います。

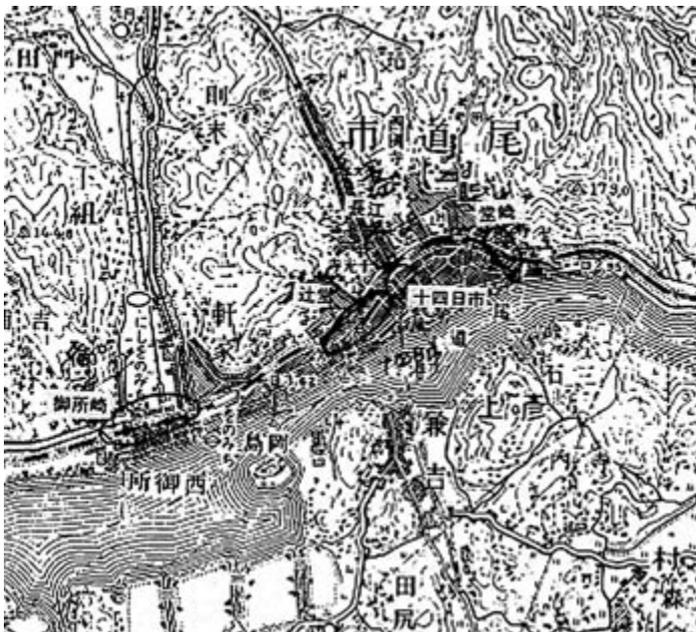
全体の方針としては、できれば昨日から発表してきた報告者の方に、なるべく自由にイメージを語ってもらい、それをコメンテーターの方たちに上手く掬い取ってもらえないかという風に思っています。

まず、野原における「場」の構成ということです。これは伊藤さんの方から、シンポジウムの準備段階から指摘がありまして、それから市村先生もおっしゃってましたが、既存の都市論、野原は都市なのかということ当てはめるのではなく、まず個別の事象をもう一度丁寧に確認して行って、その上で野原のもっている特色が出てくればという風に考えています。

最初に市村先生から、港町の中の構成単位をめぐる問題について、先ほどの御講演では連鎖的な単位というお話もありましたが、そのあたりからお話しいただけないでしょうか。

市村 さっき私がお話ししたことで十分に触れられなかった部分がありますので、その問題を話したいと思います。

先ほどの私の話しでは、基本的に港町を構成するいくつかの要素があって、それぞれに集落を形成している。それは、先ほどの尾道の例などからも、尾道と言われている港町が実は3つ4つ、あるいは5つぐらいの海浜集落の集合体であると。これは『兵庫北関入船納帳』の記載と、高野山文書のほぼ同時代の史料の中に、尾道の中に海浜集落というか港町がはっきり出てくるわけです。それ全体を含めて「尾道」と言っている事実が重要だろうと思います。同じように『兵庫北関入船納帳』から読み取れる牛窓も、複数の単位が出てきて、それが現在の地名とかなり合致するということがあって、個々の集落の単位とその中に核になるお寺がある、という現象が確認できます。



第3図 中世尾道を構成する海浜集落（市村作成）

これは決して瀬戸内海沿岸だけの話しではなくて、活字にはなってないかもしれませんが、数年前に東北の塩釜市という仙台の隣町がありますが、そこでミニシンポをやったことがあって、その時にやはり船戸があり、そして塩竈湾に複数の港湾の単位がある、というようなことを考えたことがあります。

そういう複数の集落の集合体が港町、おそらくそれは港町だけではなくて、中世の都市という風に一般的に定義されているものの中の多くが、そのような構成を取っているのではないかと思います。

そういう捉え方の出発点となるのは、20何年も前ですけど、まだ私が30代の頃に

歴史学研究会の大会報告で、私がやる1年前に斎藤利男さんが府中という中世前期の都市の話をして、「都市領域」という概念を作り出しました。その都市領域の中にいくつかの自立的な単位が分散していて、一つの町並みをもって存在する。それを承けて中世後期の発表を私が次の年にしたわけですが、その時も城下町というのが一定の領域をもっていて、その中に分散している。その多元的な構成を取るといことは、集団が自立した存在であると。自立した団体があるから中々それを統合できない。特にお寺なんかの場合には、領主も法的に統制することができない。そういう議論だったわけです。それが戦国時代の後半頃から、徐々に一元化の方向に向かうのだという議論と、実は同じなのです。その頃の発想をまだ引きずっているのですが、私はそれでいいと思っているのですが、それが港町の場合にも同じような構成であると。

今日紹介したのは、そうした個々の構成要素、構成単位としての集落の中身の問題ですが、それを一つずつ取り上げたら、一般的な都市のイメージで見たら、これは都市とは言えないようなものばかりで

すね。そうすると、「これは都市じゃない、都市だ」というのは不毛な問題になってきますから、そういう議論はしない方がいい。これも10年以上前に、中世都市研究会というのが福山でありました時に、その時に港町の話をしたのが、ちょうど私の港町研究の出発点だったわけですが、それ以来同じようなことをずっと考えてきています。あの頃はまだ十分には議論できなかったこととして、個々の集落の単位がそれぞれどういう性格の違いがあるのか。そういうことには踏み込めませんでした。

今日、お話しした中で、市場と市と町と、それから津というものは別物だというお話しをしましたのは、港湾機能・港湾施設がある。そこには海運業者だとか、それから梶取だとか、海に関わりをもつ生業をもった人たちが集まっている。それから市とか宿の場合には、そこには必ずしも海を生業とする人じゃない人が住んでいる。ですから現在でも、港町の住人が全て海と関わりをもっているかということ、そうではないですね。今でもやはり生業のあり方によって、海と関わりをもつ人と、そうでない人が住んでいる。そのもとになるような集落があって、それが統合されていった結果、海と関わりをもつようなかなか漁民的な性格をもつところや、もう少し廻船業者が多い集落がある。それから内陸部との関わりをもって農村的な要素をもっている集落とか、あるいは商業に重点を置いた集落とか、そういう多様な集落のあり方がある、それがいろんな組み合わせをしているのが、中世の港町を多様化させている要因ではないかと考えています。

そこで野原の場合には、『さぬきの道者一円日記』に5つの集落が出てきます。浜と西浜、ここはやはり海浜集落と性格にふさわしいところです。中黒には、無量寿院があったり、海浜集落の中でも特にお寺、宗教的要素が強い集落です。中ノ村の場合には、武士的な性格の強い人がいて、室山という香西氏の支城にあたるような城がすぐ背後の山にある。そうするとそこは、一種の室山城の城下の宿的な性格ももたされているところ、そういう組み合わせになっていると理解しています。そういう意味ではやはり、多様な性格をもった集落が寄り集まっているという例になるのではないかと、思っています。以上でよろしいでしょうか。

(2) 問題提起2～「都市」内における相対性

佐藤 ありがとうございます。いろいろな生業があり、いろいろな方向を向いていて、それぞれが自立して中々統合できないということがあるということでしたけれども、そのいろいろな役割が時期によっても変わってくるというようなこともあると思います。

伊藤さん、去年、中世都市研究会三重大会で、それにかからむような話題として「都市の相対性」みたいな話をされたと思うのですが、そのあたりを少しお話しただけだと思います。

伊藤 先ほど市村先生が言われたことと、ほとんど重複するようなことしか言えませんが、私も去年の大会で、相対性を重視するべしということをしつこく提言しましたので、それについて話をさせていただければと思います。「都市」もそうなのですが、「港町」とか「門前町」とかいろいろ「場」を比定する用語がたくさんありまして、それをやっていくことというのは、非常に足かせだなと思うことが、最近、多々あります。

先ほど市村先生が言われたことと重複してしまうのですが、いわゆる「都市」と呼ばれているものに限らず、その場所そのものが均一かということは、おそらく一つとしてないだろうというふうに思っております。様々な要素が集まることで、一つの場というか「在所」と言いますか、そういうものが成立

しているというのが、実態であろうと思っています。それにつながるいろいろな関係の中で、機能的に「村」という表現ができるのか、あるいはそれが「都市」という表現ができたりする、というふうに考えています。そういう意味で、「城下町」「港町」という概念で言うことによって、そのものの性格がパチッと決められてしまうということは非常に問題がある。だから今回の野原は、確かに港的な要素はあるのですが、野原イコール港町と言うことによって、逆に視野を狭めていく傾向が生まれてくるというのはつまらない、というふうに思います。

市村先生も言われましたように、こういう議論はかつてされているわけです。その辺が最近ちょっとなおざりにされている部分がありますので、再度研究史的な整理をしてもう1回原点に戻って、「場」というものを考えんか、ということをやっていく必要がある。そういう意味で今回のシンポジウムというのは、一つのきっかけとして非常に大事なシンポジウムであるという位置付けができるのではないかと考えます。そういうことを考えますと、言うまでもないことですが、野原が都市かどうかという議論は、市村先生も言われましたように既存の要素にあてはめるという意味合いでは、あまり意味がないと認識していく必要があるだろうと思います。

私が主に研究しています伊勢湾の西岸のエリアの話をさせてほしいのですが、例えば安濃津という場所を見た時には、3・4郷の集合体として16世紀代に出てきます。その時点で安濃津に相当する場所に複数在所があったと。この野原で言いますと中黒とか西浜とかは、そういうふうな状況ということができると。よく港町という名で見える安濃津というのは、そういうふうな集合体として表現できるということです。安濃津につきましては、いろんな港の性格ももちろんあるのですけれども、それ以外にも例えば寺院なんかは非常に集中している。おそらく塔柱も含めてということになるかもしれませんが、一時は10数軒の寺院が集中していて、その寺院は足利将軍が伊勢にやって来る時の逗留場所になったり、あるいは守護所そのものが寺院に置かれていたり、というふうな状況なども生まれてきています。それから、言うまでもなく陸上交通路の要衝としての位置付けもできるわけですし、安濃津といってもそこに様々な要素がそこには複合していると。ですからそれをそのまま「中世港町・安濃津」というふうに言ってしまうと、どうも制限されているような状況が生まれてしまうので、まずその辺を見直していく必要があるだろうと。

同じことは、著名な山田とか大湊についても言えます。大湊についても「浜七郷」という形で、複数郷の集合体としてあります。山田は、「山田」と書いて「ようだ」と読むのですが、「山田三方」という組織の集合体ですし、内宮の門前の宇治なんかも「宇治六郷」という集合体です。それは村落同士の結合としても出てきますので、様々なレベルで地域的な結合というもの、人々の結び付きというものが出てくるということは認識しておく必要があるだろうと思います。

話が戻るのですが、安濃津については製塩なんかも多くやっております、神宮への貢納の御厨として出てくる「安濃津御厨」というのは、塩を納めているわけです。その塩が一体どこで作られていたのかというと、おそらく安濃津の一番南端にある潟湖、入海がありますが、その入海近辺で製塩が行われていたであろうということで、安濃津イコール二次的な場所という評価だけじゃなくて、一次産業にも当然従事をしているというような評価もできる。これは、港町の話は何箇所かしたわけですが、例えば城下町と言われるような場所であっても、おそらく一緒であろうというふうに思います。ちなみに詳細は省きますけれど、伊勢の北畠氏の拠点の多気なんかについても、同じようなことが言えます。一律に多気というエリアが一面同じような状況としてあるのではなくて、領主権力の関わり方についても濃淡があるだろうというふうなことが言えます。

こういったことは、考古学の発掘調査に携わる者であるとか、あるいは歴史地理学をやられている方にとっては、言うまでもない自明の当たり前の話です。一つの遺跡を掘って同じように竪穴住居が出てくるかという、決してそんなことはないわけで、結構そういうことは当たり前と認識されています。まずこれを再度認識しておいた上で、スタートしていく必要があるかというふうに思います。そういうことで、在所対在所の関係を見ていく必要があるだろうと思います。

最後に市村さんの方から振られました。短冊形地割について一言、話をしておきたいと思います。短冊形地割というのは先生も言っていましたように、都市を構成する要素として、主要な街道沿いに細長い地割が出てくるということによって、都市的なものを見出そうというふうな見方が結構支配的です。ただ、土地が長方形に出てくる理由を、まず考えてみる必要があるだろうと。何で土地が細かく割られるのかというのは、前の道に対してその進入路を確保するためには短冊形にならざるを得ないのでですね。前に道があって、敷地があって、その敷地を分割したい。そんな時にどういうふうな割り方ができるかという、道に対して平行に線を引っ張ったのでは、その土地に対して進入ができなくなるわけです。当たり前の話ですけどね。その道との接点を確保しようとすると、自ずと短冊形になってくる。これは何を意味しているかと言いますと、道があって短冊形地割が出来てくる。道そのものが重要であるということを示しているのに他ならない。短冊形地割という土地割が大事なのではなくて、道が大事であるということを示しているのが、短冊形地割のあり方である。短冊形地割というのは、別に中世後半にかけての城下町であるとか、町、都市と呼ばれるような場所で出来てくるものだけじゃありません。現在でも、例えば土地を区画する場合には短冊形である。これはおそらく土地を分割していくにあたって、道が前提となっている場合には普遍的なあり方なのだろうというふうに思っているわけです。短冊形地割イコール都市の要素ではなくて、短冊形地割が示すのはその前の道の重要性であるというふうに考え直す必要があるだろうと思っています。

佐藤 ありがとうございます。やはりいろいろなものから構成されているということで、短冊形地割については後で時間があれば考えていきたいと思っています。

先ほど伊藤さんがおっしゃってましたが、「安濃津四郷」と同じように野原についても「野原五箇庄」という言い方が江戸時代にされていて、中世とは少し違った地名と範囲を含みますが、城下町の周辺部を含んだ形で野原という単位が5つある。伊藤さんがおっしゃったように、いろんな単位で出来ていて、一律ではない。今回は近世の城下町ということに対するアンチ・テーゼとして、あえて中世の港町という言い方をしているのですが、もちろんいろいろなところから成り立っているということは、はっきりしていると思います。

じゃあ野原というのが、そもそもどういうふうな地域構造といますか、どんな場所が一番大事な場所、どう始まっているのか。時代が変わっても、地域の枠組みを縛っていくような、一番ベースになる基層的な構造というものが、あるのかなのか、ということですね。例えば、何人かの方が既に指摘しているように、石清尾八幡宮という存在が重要なんじゃないかということがあります。

そこで石清尾八幡宮をキーに考えていきたいのですが、そもそも野原一帯は「八輪島」とも呼ばれているところ。昨日の上野さんの発表では、「やわたじま」ではないかというような発言もありましたが、そのあたりをもう少し上野さんの方から説明していただけないか。

(3) 野原の基層～石清尾八幡宮・八輪島・野原庄

上野 あまりよく分ってなくて、今もそんなに整理ができているわけではありません。「八輪島」についても、「やわしま」とか「はちりんじま」とか、どう読むのか、まだはっきりとしていないところがあります。高松城のことを調べておられる方は、事典とかで必ず、高松城の前には「八輪島」があって、島があってそこに高松城を建てたというふうに書かれているので、この言葉自体はよく知られていたと思うのですが、実態がほとんど分りません。私も文献の方で少し調べてはいるのですが……。江戸時代の地誌で『全讃史』という本があって、その中で1項目としてこの「八輪島」が取り上げられていて、そこに書かれているのも「野原の古名なりと云う」とか「古老が云々と言っていて……」とか、江戸時代後期には既に実態がよく分らなくなっている。

今回、松本さんが復元していただいているので、第1図を見ていただくと、野原が島状になっている。これをどう考えるか。この島全体が「八輪島」でいいのかなとも思いますし、あるいはもっと先端部とか一部分をとって島と、石清尾の近辺とか、やや特異な地形を言うのか。そのあたりは、まだ微妙なところがありますが、ただ文献の方ではなかなか分からなかったことが、地形復元という形で少し根拠を与えられたということで、これが八輪島だというコンセンサスが全般で得られたとするなら、それは一つ大きな成果だろうと思います。

石清尾八幡が、石清水八幡とのからみで出来たというの、恐らく事実でしょう。石清水の庄園は、志度の方に行きますと鴨部庄とか、牟礼庄とか、あと、昨日北山さんが言われていた、仁尾でも草木庄とかいったところも、石清水がかなり押さえていて、なかなかやはり海浜部のいい所を押さえているというところは指摘できると思います。したがって、どの程度まで石清水の勢力が続いていたのかという問題はありますが、中世初頭の段階では、やはりここに拠点の一つ置こうとしたのではないかということは、言えようかと思えます。そして対外的な窓口として、この石清尾の手前の島が、船から見ても目立った場所で、やや特異な地域として石清水＝石清尾という形で、そういうラインで押さえられていたということは言ってもいいのかな、というくらいです。

野原庄について補足しておきますと、野原庄自体はこの石清尾を含んだ地域でして、恐らくこの八輪島全体も含んだような場所だろうと思います。事務局の作成した資料集で、野原庄についても文書をまとめていただいております、ほぼこれで全体ですので、実態というのは非常によく分かりません。寛元3年(1245)の譲状が「妙法院文書」とありますように、ここは基本的には白河院の勅旨田から天皇家に譲られて、その後、承久の乱とかを経て妙法院の門跡、延暦寺系統の3門跡の一つである妙法院に入っているようです。その後、尊性法親王という人が、四天王寺の天王寺別当も兼ねたことから、そこに譲られていくので、そのように天王寺の念仏三昧院の一つの諸職の中に加わっていくという流れはあるようですが、基本的には本家を妙法院とする、延暦寺系統の庄園として存続したのだらうと思います。寛正3年(1462)の「教覚准書状」でも「讃岐國野原庄土貢之内萬疋事」ということで、門跡に1万疋が入っていて、寛正3年ですから室町中期段階で機能していて、妙法院に納められている。まあ、1万疋というのはなかなかの額で、手紙を書いた人(教覚)も喜んで、ありがたいというふうに言っていますが、なかなかの収益のある庄園としては維持されていたのだらうと。明応元年(1492)・2年(1493)の「北野社家日記」が終見史料で、これで見えなくなっていくのですけれども、香西千寿丸という香西氏の一人が野原の年貢請負をしていて、300疋で請け負っているという記事があって、これが1492年ですから、まあまあ戦国のある時期までは続いている庄園だなあということまでは分かる。

そこで野原の港湾施設は、恐らく石清尾の積み出しにも使われるであろうし、この場所は妙法院の野原庄の年貢がここから積み出されるような場所であったのだらうなということまでは理屈で分かるわけですが、実態として史料で細々した具体的などころまでは追いかけることができませんが、あらましから言うとそういったところでは、この資料集で結構便利なのが、年表を付けていただいているので、年表1の1492年とか1493年までは機能している庄園であるということでもいいのかなと思います。石清尾については、松本さんも……。

佐藤 先程上野さんが、内陸側の石清尾八幡宮が海側の八輪島を押さえたかったんだというふうなお話をされましたが、どうも松本さんが報告された12世紀から13世紀の荷揚げ場とか、そのような状況とも、見ようによってはうまく合ってくる。松本さん、どうでしょうか。

松本 先程ご説明しましたように、第1図をご覧ください。この段階では港、特に海浜部ですね、海浜部に集落が確認できないという状況がありまして、港だけしかないような状況です。そうしたときに私の方では何でないのかというときに、地形が不安定だったと考えています。旧香東川の堆積作用が活発であったという話をしましたけれども、比較的安定した場所というのは、康治2年（1143）の「太政官牒案」に見える野原庄の庄域（第4図）付近であろうと。この図面でいきますと、ちょうど真ん中のあたりに高松中央球場という、今は球場ではないのですが、そのちょっと下ぐらいですね、ちょうど旧河道1・2が分かれるところが非常に安定しております。石清尾八幡宮の門前にあたるといふこともありますので、おそらくこういった所にこの段階の集落が展開していたのかなということだと思います。



第4図 野原庄の推定庄域（金田原図に佐藤加筆）

少し話しが変わります、現在の港町を見てみますと、例えば志度とかでいきますと、やはり当然海に面したところに集落がある。宇多津もしかりですけれども、野原の場合はそのあたりがちょっと違っている。集落が海浜部から少し離れたところにあるというのが、大きな特徴なのかなと思います。その範囲が八輪島と呼ばれる巨大な中洲上にあるといったところもありますので、その辺は非常に重要になってこようかと思えます。

（4）港と港町～港湾と町の形

佐藤 そういう形で野原のベース、石清尾八幡宮と八輪島という関係がひょっとしたらあるのではないかなということですね。それから港町の形成が始まっていくということだろうと思います。引き続き、も

う少し地形とか港湾という観点で議論を考えていきたいのですが、松本さんが報告されました12世紀から13世紀の荷揚げ場ですね、中世の港湾としての特徴はどうでしょうか。

松本 第1図をご覧ください。不親切な図なので申し訳ないのですが、野原が12世紀から13世紀前葉の港ということですが、自然の地形に依拠したものになっています。砂堆があって旧河道が入ってくるのですが、その間に形成された潟ですね。それを利用して港を造っている。それで汀線に大きな改変を加えない。例えば真っ直ぐに切るとかいうようなことはせずに、板石を敷き詰める。一部には横木と杭を組み合わせたような船着き場を造る、といったような自然地形に改変を加えることなく、それを利用して造った港でなかったかな、というのが中世の港の特徴と考えています。

佐藤 それは去年、歴史博物館と埋文センター、それから村落研の方が現地調査されて、讃岐の港町を歩きましたが、大体同じ時期の他の港町でも共通していることなのではないでしょうか。それとも野原だけ特殊なのではないでしょうか。

松本 同じ時期の港町と言われても……。やはり昨日、北山さんの方からも報告がありましたが、やはりこういった砂堆と、その背後に形成された潟というのが基本ベースになってくるかと思います。他の港町を見ると、河川の河口にあるところは別として、潟というのは当然、埋まっていきます。埋まっていく中で、今まで港湾機能があったところにその機能がなくなる。実際、野原でも奥にあった港湾施設が前に移るといった現象が指摘できますので、潟というのはだんだんと埋まってくる。そして、県内の他の中世の港町を見たときに、こうした潟は見られるんですね。北山さんの報告でもあったかと思いますが、そういった潟が埋まって行って港がその前面、砂堆の海寄りに出てくるところはありますけれども、基本地形としてはこういった自然の地形、砂堆と潟というのが大きな要素になるのかなと思います。

(5) 地域単位と居住者～その構成と生業

佐藤 その港湾施設の周辺に13世紀後半以降になると、集落が出来てくる。具体の事例として浜ノ町遺跡というのが出てきます。

その遺跡の調査成果や、『さぬきの道者一円日記』に書かれている野原中黒里などを踏まえて、実際のあたりにどんなふうな人たちが住んでいて、どういうふうな生業がなされていたのか、ということを考えたいと思います。市村先生、もう一度、『一円日記』に書かれている野原の地域単位の中身といえますか、地域単位毎の特徴をお話いただければと思うのですが。

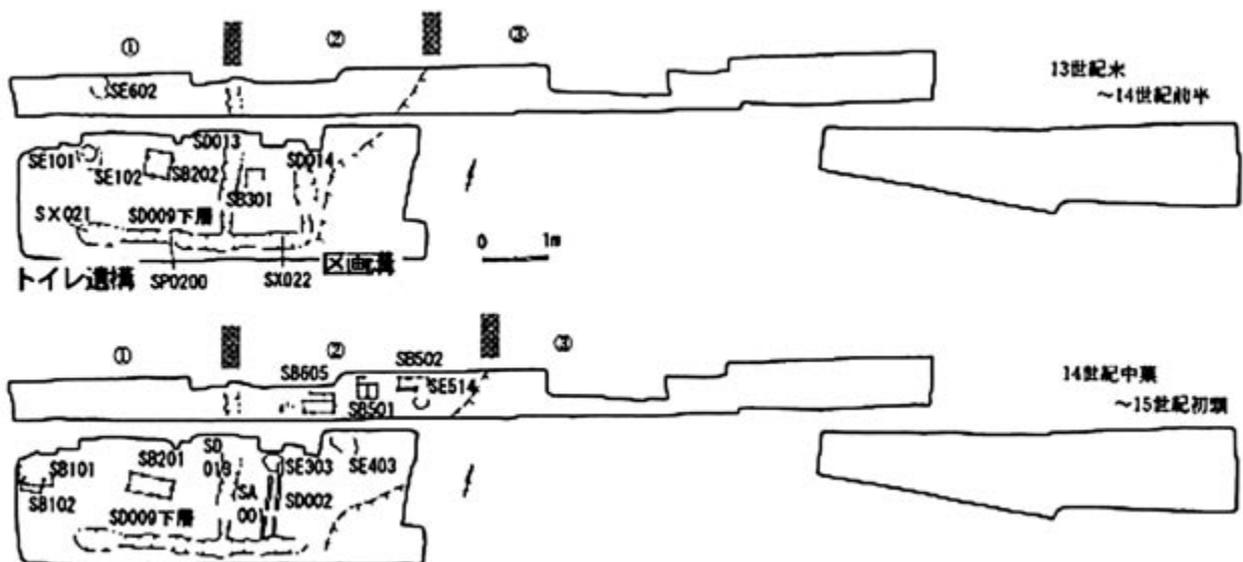
市村 はい、中心になっているのは中黒里といわれている所です。これは八輪島と言うのでしょうか、川で囲まれた島状の所の尖端部から中央部あたりです。ここにはお寺がたくさんあって、談義所とあるのは、上野さんがご指摘されるように無量寿院です。その他に数ヶ坊のお寺が出てくるのです。その中には恐らく無量寿院の塔柱として位置付けられるようなものも入っていると思いますが、一つの集落に複数の多くの寺院があることで、やはりそこが聖地というか、特別な意味をもった宗教集団の居住地になっているのではないかと思います。そういう所であるが故に、後で城を造る。それが地域統合のシン

それから中ノ村というところが、石清尾山の一番端の方の突端部に室山城というお城がありまして、地元の城郭研究者の松田英治さんにご案内いただきました。かなり大きな土塁を造っていて、コンパクトですがよく造っている城で、戦国期に多分使っていると思うのですね。その城のちょうど北側にあるのが中ノ村ですから、しかもそこには雑賀の何某という紀州から移ってきたという香西の家臣が住んでいる。そういう所ですね。おそらくその中ノ村と南側の坂田土居里、この辺が室山城に関わりをもつような人たちが住んでいる所かなと思います。中ノ村は、室山城との関係で香西氏の息のかかった人たちが住んでいるような場所ではないかというふうに私は理解していますが、そうじゃないという意見もあると思うので、それはご指摘いただければと思います。

佐藤 ありがとうございます。市村先生のお話を踏まえつつ、海側の浜ノ町遺跡を中心にした地域は、寺院なんかも含めてどんな集落だったのかということ、松本さんお話しください。

松本 そうですね、浜ノ町遺跡については第6図をご覧ください。私としては、遺跡の評価としては、区画溝をもつといった点では中世的な、高松平野の一般的な集落とは大差ないのですが、その内部に14世紀前半にトイレの遺構を整備したり、同じ時期に井戸枠に結桶といわれる桶を使ったり、さらには灯明具を使用する、夜に明かりを灯す生活があったということから、都市的な生活スタイルを取り入れた集落であると考えています。

それに加えて市村先生もおっしゃったように、土錘なんか900程出て、漁民的な道具もある。さらに遺跡の中からは瓦なんか出てきて、一部には瓦質の仏具なんか出てくるというところで、お寺とは言わないまでも堂のようなものがあった可能性もある。しかも集落から出てくるものは、香川県以外からの搬入品が多い。そう考えますと、いろんな要素がごった煮的に入った寄せ鍋みたいな集落であったのかなと思います。それがこのように渦に面してあるということで、私の方ではある程度港湾の管理ならびに流通の管理なんかをしていた集落なのかな、というふうに想定しています。



第6図 浜ノ町遺跡変遷図 (乗松・松本作成)

佐藤 浜ノ町遺跡を中心にした浜側はそういう状況であるということですね。それから内陸の方は、トータルイメージは市村先生がお話しされたようなところですよ。

ところで『一円日記』は、伊勢の御師が檀那を廻って、伊勢土産、例えば扇なんかを配って、それで初穂料という形で対価を得ているという活動の記録です。そこには港町とされる場所、例えば方本・西方本では、ほとんどが銭で初穂料を支払っています。だからイメージ的に単純に言うと、港町だから銭が集まって来るみたいなイメージをもってしまいがちですが、野原に戻ると海浜部に近い中黒里・野原浜という所では銭はありますが、内陸部の方へ行くとあまり多くないという状況ですね。

そうすると、伊藤さんも指摘されていましたが、多様な生業があるようだ。このデータだけでは難しいとは思いますが、伊藤さんの観点からではどのようなことがイメージできますかね。

伊藤 仮に農村であっても銭は遣うと思いますし、佐藤さんが言われたように、単純にはいかないとは思いますが、確かに何かそういうふうな見方ができる感じのデータだと思います。これについて、今、私はよう判断し得ないのですが、一応、そういう観点で見てもいい史料なのではないかと思いません。

佐藤 三重の方の、伊勢湾の有名な都市の安濃津ですね。安濃津も一括りにしているけれども、そういう農業的な要素も、当然、地域の中であるということですか。

伊藤 先程話したように、当然農業にも関わっていますし、製塩業はやっていますし、それから発掘調査の事例ですけれども、ソバの種が出てきたというのがありますので、おそらくソバの栽培なんかも都市近郊でやられていたということもありますので、やはり多種多様なものがある。

それで野原の中黒にしても、そういう銭で支払う連中もおれば、そうでない農業関係で支払われる連中もいると。で、問題は伊勢御師が何でそういうものを要求したのかと。それとも地元の者が銭しか払えないから銭でしているのか、その辺の判断は何とも分からないのですが、ただ要素として確かに方本の方なんかは銭で支払われていることが多いので、何か港町の業者的な関係も見たくなるなあ、という位ですが。

佐藤 ありがとうございます。それをもう少し見ていきますと、何回も言うように方本では銭が100%に近いのに、野原では海浜部でも銭が58%と40%となっているんですよ。海浜部でも銭が100%ということでは野原ではないようですね。その辺、方本と野原ではどんなところが違うから、そういう違いが出てくるのかということは、何かその辺のイメージというのは……。渋谷さん、古・高松湾というテーマでお話しされましたけど、方本と野原の比較の中で、何かこうじゃないかというのは、ありますか。

渋谷 従来の考え方でいうと、銭の方が流通が発達しているというふうに思われがちではないかと思うんです。私の発表の中では、古・高松湾の東側と西側とで、つまり方本の野原の方で、だんだん野原の方に比重が移っていくというところがあったと思うんですけども、その具体の部分で私の準備不足というのもあるって、じゃあどの時点で比重がひっくり返っていくのかということですね。なぜ野原の方を後に生駒が選択していったのかということにも繋がってくるのかとは思いますが、はっきりと具体的な



第7図 古・高松湾の東側（方本－高松郷）と西側（野原－坂田郷）
（市村・松本作成）

ところは難しいんですけども、ある程度、古・高松湾における先進的な位置に、実はまだ方本の方があって、やがてだんだんと野原の方へ移っていくという一つの過程の表れとして、この銭の問題があるのではないかと。本当にイメージでしかないんですけども。

佐藤 ありがとうございます。渋谷さんの意見では、古・高松湾をはさんで、まだこの段階では方本の方に都市機能みたいなものが残っているのではないかと、というイメージでした。こだわるようで申し訳ないんですが、もう少しだけ言うと、例えば去年港町を歩きましたが、地形的な観点とか立地の中で方本と野原を比べた時に、そういう違いみたいなものが……。方本の方は、逆にいうと銭しか支払う余地がないのではないかとこの気もするんですが、その辺を松本さん、いかがですか。

松本 去年、全然歩いていないので、何ともいえないんですが……。ただ昨日、渋谷さんの発表にあったように、馬の腹が海面に漬かったという『平家物語』の記載もありまして、第7図をご覧いただきたいんですが、第7図に古・高松湾の全体図を載せているんですが、方本というのは屋島の下側で、今は当然陸地になってます。おそらく渋谷さんが言うように、古代、古墳時代から中世の早い段階までは高松郷、つまり湾の東側の方が中心的であったのかなと。そういう中で、たくさん川が古・高松湾に流れ込んでいまして、最終的には遠浅の海岸ができて現在のように埋め立てられたという大きな流れがありますが、川の堆積作用によって方本は港湾機能を維持することができなくなったのかな、というふうには思うんですけども……。

佐藤 後背地の問題ですね、港町の後背地がどれだけあるかという問題にもからむのかと思ったのでお聞

きしたんですが……。

市村 ヒントになればと思ひまして、一つだけ例を出してみたいと思ひます。数値はちょっと覚えていないのですが、野原から『兵庫北関入船納帳』で積み荷になっているものが、塩の他に多様なものが荷物になっているんですね。それに対して方本と庵治はごく単純で、塩が中心なんです。特に庵治なんかは、後背地がかなり狭いですし、方本は島で陸続きになったとしても、ここでも塩の生産が中心ですから、そうすると他のもので納めなくても換金した銭でいくらでも払える。野原との積み荷の違いは、生業とか生産の背景が違って、その問題が銭で支払っているかどうかという違いに影響しているのではないかと思います。いかがでしょうか。

佐藤 ほとんど結論になってしまったので、そういう可能性もあるということでお聞きしたいと思ひます。そのような後背地の問題と、伊藤さんも言われましたが地域の中で農業的な要素があるとすれば、違う話になるかもしれませんが、大嶋さんが高松城の地域の中世を考える時に、条里型地割の問題と、条里型地割とは違い自然地形に依拠したような地割の問題が中世まで遡るのではないかと、ということコメントで言われました。発掘地点が限られているので難しいとは思ひますが、もう一度、条里型地割というのが一体、この地域の中でいつ頃からどの辺まで来たかということをお話してください。

大嶋 この野原という中で、10～11世紀に集落の中心であろうと皆さんが思われている南部の方の状況が今ひとつ、発掘調査がないのでよく分かりません。ただ、第1・2図を活用したいと思ひますけれども、6・7あたりでは中世の海岸線を意識した地形が見られます。そこが15～16世紀になると、やはり条里型地割の延伸が及んでくるということになります。そこが15～16世紀にならないと、かなり安定した地形になってないのではないかとということが窺えます。それから11の無量寿院跡ですが、この部分は12～13世紀の溝も16世紀の溝も、どちらも条里型地割に合致しません。といったことで、この部分は築城期まで条里型地割の延伸が及ばなかった地域というふうに考えられます。ただ先程の発表で、西の丸町地区で10° くらい東に振っているところがあるということで、ちょっと自分の考え方がどうなのかなということもあります。ただ、北側と南側の地形でかなり大きなずれが、中世段階にはあったことは窺えます。

佐藤 どうもありがとうございました。大体、そのように地域単位、あるいは生業が多様だということが、おぼろげながら見えてきたのですが、生業から少し外れますけれども、墓地の問題ですね。松本さんが第1図で破線で囲っている砂堆が形成されて、第2図では陸地化していると。確かこの辺で火葬墓が検出されていると思ひますけれども、野原の中でどのような場所が墓地になっているのかというイメージ、それから他の港町でもそのような立地の問題を考える手掛かりのようなものがあつたかと思ひますが、ちょっと説明をお願いします。

松本 他の港町の状況がピンとこないんですが、第2図をご覧いただければと思ひますが、ちょうどこの歴史博物館があるところが4でして、海側の県民ホール(3)の下とここからは16世紀の後半くらいだと思ひますけれども、石組の火葬墓が出ています。周辺では釣針なんかも出ていますので、漁業を主な生業としたような人の墓ではなかつたかと考えられます。そこから海沿いを辿ってもらって5のと

ころ、ここには高松城の鉄門があるんですけども、そこには多量の中世末の石造物があったと。この段階で石塔を建てるということは、相当な階層の人だとお聞きしてますので、この海縁の部分、第1図では破線で示した砂堆の部分ですが、ここには広大な墓域が設定されていて、しかも多様な被葬者像というものが考えられます。

佐藤 ありがとうございます。松田さんの話が出たので、香川県内の石塔を片っ端から見ている石塔マニアみたいな方ですが、今、松本さんが説明された海辺の砂堆以外で、石造物の在り方などから、他にどの地域に墓地があったのかなかったのか含めて手掛かりになるようなことはありますか。

松田 はい。浜ノ町遺跡で、江戸時代に中世の石造物を再利用して石列を作っている訳ですけども、この石造物を見ますと14世紀初頭から16世紀にかけて連綿と時代毎の石造物が見られるというような特徴があります。その中でも一番古い石造物というのが火山の層塔という石造物になります。この層塔というのは非常に高い、大きな石造物でありまして、五輪塔とか他の石造物に比べて非常に目立つ石造物になります。非常にシンボリックなんですけど、これが浜ノ町遺跡の近くにあり、墓地景観をなしていたと思われるのですが、恐らく海から見たら、この層塔が目印になるくらい、目立ったと思われます。そういう墓地景観が、この浜ノ町に中世を通じてあったということが一つ復元できようかと思えます。

(6) 港町を統合する主体～寺社と領主

佐藤 ありがとうございます。それでは引き続き、そういった多様な場をもっているところ、先程市村先生も自立した単位が並び立っていて、なかなか統合できないというお話しをされましたが、そういったものを緩やかながらでもまとめていったり、形づくっていく時の核になる存在ということで、寺社と領主ということに注目したいんですけども、上野さん。野原周辺での各宗派とか神道関係とかが、野原に入ってくる時期に何か特徴ありますか。

上野 まあ、報告の方でも少し述べたんですが、13世紀後半から南北朝、室町前半に真言宗系の寺院が入ってくるのかなと。でそれ以降、戦国期に浄土真宗が入ってくると。浄土真宗は興正寺派が阿波国から讃岐の南に広がっておりまして、海浜部には本願寺系統が入ってくるとされていますので、基本的には野原も本願寺系統が入っているのかなと思われまます。真言の方で言えば、増畔の話は少ししたんですが、室町前半のお坊さんで熊野系統の勧進聖と言われていたんですが、彼らは結構清廉潔白で、港湾沿いの寺院の復興活動をしていますので、おそらくこれも領主層の働きかけなり、協力があるのかなと。各地域の領主か、むしろ細川氏あたりが仁尾あたりでは絡んでいるのかと思うんですけども、仁尾で覚城院というお寺を増畔が復興することも、仁尾はほとんど守護領となっていますので、細川が賀茂神社に楔を打つのに覚城院を復興して別当寺にしていくような動きが恐らくあるのかなと。ただ文献上、ちょっとそういうことの裏付けが取れないんですが、そういう流れで領主層と勧進聖が協力して港湾もお寺も整備していくような動きがあるのかなという見通しはもっています。

それで無量寿院が坂田から野原に移ってくる時期というのは、天文年間かもう少し早いのかもかもしれませんが、恐らく無量寿院が民衆寺院化するためには山岳系として内陸にいるよりは、海浜部の人たちにとってその価値が高まったのを踏まえて移転するのかなというようにところもあるので、野原の人々が

求めるのに応じて寺が集められていくのかなと思います。大きな動きとしては、そういうことなのかなと考えています。

佐藤 同じ野原でも宗派とか時期によって入ってくる場所、あるいは押さえない場所の違いのようなものはあるのでしょうか。

上野 そうですね。岡田氏の動きなんかを見ていると西浜の方なんですよ。無量寿院が入ってくる中黒里は割に東のやや入った場所ですので、そういう意味では棲み分け的なことがあるのかもしれませんが。ただ浄土真宗系統がどういう位置で、ということは佐藤さんが話されていたような、城下町での位置関係からむしろ遡及的に分かっていくのかも知れませんが、そのあたりはまだ十分には考えていません。それで、香西氏が本願寺との関係もあり、香西の港の方へ自分の菩提寺を浄土真宗で造っていると。ただ野原の方にはそれ程大きな動きがないというのは特徴的です。坂田にも福善寺という本願寺系統のお寺があって、恐らくそれは香西氏がかんでいるのかなという感じも少しして、そのあたりは文献からは追いきいんですけれども、割に領主層の息がかかっている可能性が真宗系統はあるのかなという気はします。

佐藤 ありがとうございます。それから昨日、上野さんのお話しで寺院に情報センターのような役割があったということをおっしゃっていたと思うんですが……。

上野 そうですね。やはり無量寿院の存在というものも、当初はどれ程のものかと思っていたのですが、やはり野原の地域の中心的な役割を担うのかなと。それで情報センター的な位置付けというのは、かなりこの地域ではあるのかなということは、何となく皆さんの話を聞いているとそういう位置付けをしてもいいのかなという感じはあります。建武元年に医書が集められるというのも、恐らく無量寿院あたりだと思うんですが、やはりそういう当時としては質の高いものが選ばれてここに持って来られるというのは、文化的な機能があるのではないかと思います。

佐藤 ありがとうございます。例えば西日本や瀬戸内で見えていくと、13世紀から14世紀に西大寺系の律宗が伝わっていくということもありますが、そのあたりを佐藤重聖さんが追いかけていると思うんですが、そういう眼で野原における無量寿院の役割というものに、何かイメージはありますか。

佐藤重 野原に律宗を求めようと私も探しましたが、残念ながら分からないです。ただし讃岐において、律宗というのはある時期、あだ花のように活動したということは、屋島寺が西大寺の末寺として機能していますし、それ以外にも西大寺の二世長老真空が鷲峯寺に入り讃岐国分寺を復興することなどがみられます。あと、野原にどの程度、直接の関わりがあるかどうかは分かりませんが、普通寺の復興の問題が弘安年間以降、意味をなしてくるのではないかという気もしております。讃岐そのものは大覚寺統の経済基盤になっているのですが、その大覚寺統が梶子入れして普通寺を復興します。この復興事業に当たっている勸進職の坊さんは、京都の泉涌寺系の北京律の坊さんなんですよ。そしてその復興事業には兵庫津の上がりを利用されており、兵庫津には大覚寺統がかんでいる。西大寺の観尊が兵庫津で受戒することは、こうした大覚寺等の経済活動の一環ではなかったかという藤田明生先生が『ヒストリア』で

なされているご指摘を考えますと、信空以前の讃岐地域と律の間に何らかの関係はあるのではないだろうか。そういうところで、例えば石造物なんかで弘安元年の白峰寺の十三重石塔の在り方なんかも考えていく必要があるのではないかと考えていますが、直接的な証拠は私自身もまだ集めている訳ではないです。

佐藤 はい、ありがとうございます。じゃあ続いて領主層の野原での在り方なんですけれども、遡れば野原庄ができた段階から庄園の管理者みたいな領主がいたりというところから始まると思うのですが、『一元日記』で見ますと、野原中ノ村の周辺にそういった香西氏の配下らしい姓をもった連中がどうもたくさんいるみたいだと。そうすると、これは先程、野原のベースになる基層的な部分で内陸部の石清尾八幡がまずあって、海浜部とアクセスするという流れでいうと、石清尾八幡つまり中ノ村周辺にたくさんいてもいいんじゃないかという気もするし、逆に言うと戦国期の後半になっても海浜部に出て行けないというところもあるんじゃないかという気もするんですが、そのあたり市村先生の解答をいただく前に伊藤さん、上野さん、何かイメージありますでしょうか……。ないようでしたら、市村先生、一言お願いいたします。

市村 難しい問題を振られてしまって……。西浜の方に岡田氏の居館があったという話があって、松田さんのご報告の中でも石造物でもかなりいいものが出ています。それが岡田氏に関わるものじゃないかという話なんですけどね。岡田氏のイメージがどうもまだはっきりしていなくて、伝承の世界の人物で、岡田氏の文書というのは生の文書としてはないんじゃないでしょうか。それでちょっとイメージが浮かべなくて、岡田氏については触れなかったんですけども、ただああいう石造物があって、それから松田さんの話では層塔があったということは特別な意味があって、層塔というのは松田さんの受け売りですけども、そんなじょそこらにあるものではないだろうと。特別な場にあるんだということですから、そうすると西浜が特別な存在であるのは、領主との関係なのか、寺院との関係なのかという問題ですけども、それに多様な要素が混ぜこぜになっている。松本さんの言葉を使えば「寄せ鍋」だという、そういう特別な場ということで、そうすると中黒の方はむしろかなり宗教色が強くて、聖地という性格が強くにじみ出ているような気がします。それで、外から来た人たちは当然、西浜に多くいた可能性があります。西浜の方は『一元日記』であまりたくさん出ていませんでしたので、実態は分かりません。

それで、中ノ村の方が岡田大夫の一円の縄張りであった可能性があり、いろんな人が出てきて、その中で香西氏の家臣で雑賀出身がいたりする。佐藤氏も紀州の雑賀から来たという伝承がある。それらが香西氏の家臣になっているとなると、あるいは香西氏が香西の港を掌握しながら、それとの関係で香西の港に来た外来の武装商人集団を引っ張ってきている可能性がある。それであの場所は、川港になるような場所ですから、内陸といってもただの内陸ではないみたいなんです。ですから中ノ村にも、海との関わりがかなりあるのではないかと思います。

佐藤 ありがとうございます。今、市村先生の方から中黒は宗教的色彩が強い、ひょっとしたら聖地なんではないかというお話が出ましたけれども、上野さんが一時そのことを触れられていたと思うんですが、いかがですか。

上野 無量寿院の縁起的な文章の中で、八輪島あたりが一種の聖地だみたいな話が出されていて、無量

寿院と八輪島が強い繋がりをもっているんだというような記述自体はあって、そういう認識が生き続けて、それが中黒里に集約されていくのかなという感じですね。

佐藤 ありがとうございます。先程伊藤さんに振ったのは、去年、中世都市研の三重大会で安濃津とか港町のと真ん中に城館がない、みたいな話があったかと思うんで、その辺でこの野原をどう見ているかということだったんですが、どうですか。

伊藤 そういうことであれば……。港町をどこが発展させていくかということは、必ずしも領主権力が携わって港町が発展していく、例えば市村先生がお話しされた十三湊なんかはそうだとされていますけれども、必ずしもそれがオーソライズできる話ではなくて、比較的直接的にはからまない、その場からんでくるような港町というのは、基本的にはあまり出てこないと思います。それが結構潰されてくるのが織豊期、地域によっては織豊前期や後期、あるいは江戸期になったりということはあるんですけども、その辺が一つの画期となって、旧来の港町が潰されて変わってくるという下地があるかと思いません。

そういう意味で野原を見ますと、織豊段階でようやく城が海浜部に進出するということを見ますと、やはり市村先生も指摘されているような、自立的で相互的な結合があったということ想定してもいいのかなと思います。

佐藤 ありがとうございます。非常にすっきりした答えで、すっきりいたしました。

■ 3 野原の位相

佐藤 続きまして、「野原の位相」ということで、今までは野原の内部に焦点を当てた話をしてきましたけれども、今度は野原をもう少し広いエリアで見た場合にどう位置付けられるかということ、いくつかのレベルで考えたいと思います。しかも時期限定ではなく、できるだけ長いスパン、古代から近世の初めくらいまでで、なるべく大風呂敷を広げた話をしていきたいと思います。

まず問題提起として、これは去年から伊藤さんが言われてきたことですが、「都市」あるいは地域の相対性みたいなものがあるんだということですが、その辺りからお願いできますか。

(1) 問題提起 3～「都市」と地域の相対性

伊藤 午前のコメントでもお話しさせてもらったんですけども、「都市」なり「町」なり同じだと思うんですけども、場の問題を考える時に、周りとの関係を考えていかざるを得ない。野原の中にも中黒と西浜が違うように、あるいは天満が違うように、そういう相関関係のようなものがあるんですけども、じゃあ対外的に「野原」と一括りに見られた時に、野原のもっている相対性というものは一体何なのかということだと思います。これを「都市か否か」という不毛な議論にするのではなく、野原というものがあったことでどういう地域が形成されているのか、織豊期になってどのように地域が改変されていくのか、ということの議論を進めていったらどうか、と思います。当然そこには、野原の持っていた中世前期から後期を経て織豊期に至る時間的な変遷もある訳ですから、その中で今までなされてきた

検討を踏まえて、地域の中でどのような相対性をもっているか、という議論をしていけばどうかと思います。

佐藤 ありがとうございます。午前中の伊藤さんのコメントの中でも、「地域」の中で研究していると、なかなかそのような広い視野に立つことが難しいというようなこともあり、どこまで行けるかはちょっとよく分からないんですけども、進めていきたいと思います。

まず、地域のレベルとして3つくらいのレベルで考えていきたいと思います。一つ目は、昨日から話が出ていますが「古・高松湾」、つまり高松の平野部に湾入していた海域周辺での話です。二番目に、讃岐1国の中での野原という位置付けを考えたいと思います。三番目は、これは野原に限定するのが難しいので、瀬戸内海の東半分、備讃海峡周辺から大阪湾までの中・東部瀬戸内における野原というよりも讃岐、といった形で考えていければと思います。

(2) 古・高松湾における野原～高松郷と野原

佐藤 まず「古・高松湾における野原」ということで、渋谷さんの発表の中でも高松郷と野原の対抗関係みたいな話が出てきましたが、昨日の渋谷さんの発表が時間が足りなかったということもありますので、確認という意味で高松郷と野原の対抗関係の基本的な枠組み、それから具体的な歴史事象として平氏政権とか南北朝動乱期の話とか、その辺りをあまり時間はないので、手際よくまとめてお願いできればと思うんですが……。

渋谷 手際よくですか……。私のレジュメの方で、第8～10図が古・高松湾を考える時に、人の流れやモノの流れを原始・古代、中世、近世というふう到大雑把に捨象して落とし込むと、こういう図になって、一つの目安になるんじゃないかということで、この地図を作った訳です。その中でも、例えば古代におきましては古墳時代まで遡りますと、野原の後背地に石清尾山古墳群というのがありますが、その古墳群の特徴としてどちらかというと在地性が強いという特徴があり、それに対抗するような形で古・高松湾に注ぐ新川沿いになるんですが、畿内的な色彩をもった高松茶臼山古墳とか、石清尾の西側の本津川沿いに今岡古墳といったような形で、どちらかというと畿内系といわれているような古墳が造られている。私の立脚点が政権側の方から見がちなんですけれども、そういったところで野原をさらに遡った石清尾まで含めた場合に、それを挟み込むような形で畿内勢力が入り込んでいるのではないかという形をイメージしています。そういった中で古・高松湾においては、後で触れるかとは思いますが瀬戸内海の制海権をめぐる屋島から方本あたりに政権側として重点が置かれて、そちらの方に古・高松湾の中心が置かれていたのが、先程松本さんもおっしゃいましたが段々と港湾としての機能が低下していくにつれて、野原の方へ移っていくのではないかなというのが、大きな見通しになっております。

それで平氏政権、南北朝動乱期、戦国期とありますが、その中でも平氏政権については、古・高松湾の中でなぜ屋島に入ったのかということですが、その時の野原の状況が全く分からないので何とも言えないんですけども、まあ鎌倉時代においても古・高松湾の東側というのがヘゲモニーを握っていたのではないかという気がします。それをヘゲモニー争いという問題を単純化してしまうんですけども、西側と東側とで争奪戦みたいなものが行われてきていて、やがて野原の方へ行き着いて、やがて生



第8図 人・モノの動き (古代以前)



第9図 人・モノの動き (中世)



第10図 人・モノの動き (近世)

(渋谷作成)

駒が入ってきた時には高松城が野原の方に造られるというところが大まかな流れになるかと考えています。

佐藤 ありがとうございます。普段聞いていると、もっと歯切れよく話ししてくれてるんですが、そうすると古代から中世を通じて古・高松湾の東側から西側へ移っていくというその流れはあるとは思いますが、それがそんなにきれいに移り変わっていくのかということについて、渋谷さんのイメージはどうですか。例えば『兵庫北関入船納帳』での方本と野原の在り方、あるいは『一円日記』でのそれを踏まえていくと、どんなイメージがありますか。

渋谷 そうですね。大まかに見ると東から西になるんですけども、それぞれの局面においては西に行ったり東へ行ったりすることがあると思うんです。それで勿論それは、古・高松湾世界だけでなく、讃岐全体でも西の方を向いている時は宇多津が中心になってくるということもあるし、そうした時にはどちらかという古・高松湾の勢力争いも西の野原の方へ動いていく。例えば南北朝期の細川定禅の蜂起も、それを支えた人たちというのもどちらかという古・高松湾に限定して言いますと西側の勢力で、東側の方を打ち破るような形になってますね。そういった形で常に東側の方本が優勢だったという訳ではなくて、時と場合によってははっきりと野原が優勢だったという史料はないんですけども、野原の方に時には傾きながらも、また方本の方に傾くという揺り戻しをしながら野原の方へ行くのではないかと考えています。

佐藤 ありがとうございます。そういった基本的枠組みをもっている古・高松湾で、もう少し考えていくとすればどんなモノが出入りしているか、モノがどう動いているのかということだと思んですが、先程、佐藤亜聖さんが「土器は流通のごく一部をトレースする材料に過ぎない」というふうにおっしゃってましたけれども、この地域にあっては大阪の和泉型瓦器という、真っ黒くて薄い器が来るんですが、それに対して地元で作っているものが外へ出ていく時に、野原というところがどのような位置付けにな

るのかという問題もあるんですが、その辺を松本さん、いかがでしょう。

松本 そうですね。野原の湊というのは、やはり瓦器が入ってきているということでいろいろ考えまして、昨日のような発表になった訳なんですけれども、逆に瓦器はたくさんあるんですけれどもその他の土器、例えば吉備系の土師器であったり東播系の須恵器であったり、輸入磁器であったりというのはたくさんは入って来ない。普通の集落と比較しても、そんなに目立った量ではない。ということは瓦器の集積地ではあったけれども、他の土器の集積地ではなかったというふうに考えられます。違った経路で入ってきたのかなというふうに考えられます。

逆に香川県の中世でいえば綾川町の十瓶山窯跡群の須恵器というのは非常に有名ですけれども、その土器の出土比率というのは非常に低いものでしたので、野原の湊からは十瓶山窯産の須恵器は運び出されていないということは言えるかと思えます。十瓶山窯の須恵器については、そのまま綾川を下って坂出の国府の湊と言われます林田津に集められて、そこを集荷地として運び出されたのかなと、いうようなことが言えると思えます。

佐藤 ありがとうございます。その点をもう少し考えたいんですけれども、第1表をご覧ください。こちらで松本さんが高松平野での和泉型瓦器碗や土器の出方をまとめてまして、昨日詳しい説明があったかと思うんですが、これは要は海に近いところ、外からモノが入ってきて接しやすいところにたくさん入っていて、平野の奥へ入っていくとどんどん減っていくという、ある意味自然的なモノの流れというものをイメージしているんでしょうか。それとももっと違うことを考えているんでしょうか。

松本 正直微妙なところで、私もかなり揺れています。というのは、松並中所遺跡という遺跡があります。これが香東川の旧河道2とした部分に近い20の遺跡です。非常にダイレクトに野原の湊と繋がっていますので、こういうふうに瓦器の組成比率が高いというのも頷けるんで、地理的な傾斜なのかなという気もするんですが、そうじゃない部分もありまして、日暮・松林遺跡の方では佐藤亜聖さんの方に、その辺りを含めて、高い視点からお話いただければと思うんですけれども……。

佐藤亜 はい。日暮・松林遺跡がなぜ瓦器の比率が多いのかということは、分かりません。ただし私は、視点として大事なものは、モノが運ばれてくる。そしてそれは、全て庄園内で使われるために運ばれてくるのではない、ということですね。つまり庄園内流通というものだけではないことを示しているんだと思います。つまり内陸部へ拡散していく動きというのは、これはこの段階で運んできた人間の手を離れている訳でありまして、その地域の流通圏に乗かって内陸へ広がっていくという流れを示しているんだろうと。そういった動きと同じ流れで広がっていくのが、吉備系の土師器碗。吉備系の土師器碗も、やはり数%が内陸のあちこちで出てくるという状態でありまして、この部分に関してはやはり野原の方向性といいますか、野原が向いている方向性、これが庄園の外港としての意味よりも、平野部全体の出入り口としての意味合いをもっているんじゃないかと、私は今のところ思っている次第であります。

それでその範囲がどこまで行くかというのは、正直分らないんですけれども、土器から気になっていきますのは、丸亀平野における瓦器碗の出土状況です。丸亀平野でもかなり少数ですがどこの遺跡でも瓦器碗が出てくるような状況だと思うんですけれども、今のところ宇多津とか多度津で瓦器碗がたくさん出るという遺跡は見つかっていない。これから先出てくる可能性は大いにありますので断定はできな

第1表 高松平野と野原の中世土器組成（松本作成）

遺跡名(遺構名) 器種	高松城跡 (西の丸町地区) II	高松城跡 (西の丸町地区) III	高松城跡 (東町奉行所跡)	
	S X b 16	磔敷遺構全体	S R 3001	
所属時期	12世紀前葉～中葉	12世紀後半～13世紀前葉	12世紀～13世紀初頭	
土師質土器	小皿	12.65	8.7	6.2
	坏	7.04	4.6	8.3
	椀	3.86	6	4
	甕・鍋類	15.67	13.4	24.8
須恵器	椀	0.54	4.9	4.8
	小皿・坏	0.04	0.3	0
	甕・壺類	1.34	1.8	4.3
	鉢	1.4	1.8	0.4
黒色土器(A類) 椀	4.18	0.6	2.3	
瓦器椀・皿	43.18	37.4	38.4	
吉備系土師器	3.75	2.8	4.4	
東播系須恵器	2.66	0.7	0	
中国産磁器	白磁	1.16	1.5	1.2
	青磁	0.08	0.4	0.7
その他	3.45	15.1	0	
遺物点数	2,584	4,017	693	

遺跡名(遺構名) 器種	松並・中所遺跡	六条・上所遺跡	空港跡地遺跡IV	日暮・松林遺跡
	Ⅲ区B・C S D 01	S R 12	S D f 16南辺	S R 02
所属時期	12世紀後半～13世紀前葉	13世紀代	13世紀代	12世紀後半～13世紀初頭
土師質土器	小皿	8.4	5.9	8.7
	坏	9.3	29.4	39.4
	椀	11	0	0.1
	甕・鍋類	19	27.1	14.6
須恵器	椀	1.1	12.9	13.9
	小皿・坏	0.1	2.4	1.4
	甕・壺類	2.2	2.4	1.6
	鉢	0.8	3.5	4.9
黒色土器(A類) 椀	9.5	0	0	0
瓦器椀・皿	19	3.5	1.9	49.7
吉備系土師器	0.4	9.4	6.5	2.2
東播系須恵器	0.3	0	0	1.5
中国産磁器	白磁	0.5	0	2.8
	青磁	0.1	0	1.7
その他	18.3	3.5	4.2	0
遺物点数	1,575	85	635	-

いんですが、もしかしたら中讃地域全体の近畿方面の出入り口として野原という場があった可能性も一つあるのかなというふうにはちょっと思っています。

佐藤 ありがとうございます。やはり考古学というのは、出てないものは言いづらいというところがあるんですが、逆に言うとどれだけ揃ったら言えるのかという、ジレンマの中で皆さん考えているんだと思うんですが、そうするとちょっと意地の悪い質問をしますと、なぜ方本じゃなくて野原なんですか。

佐藤 亜 それに関しては私もこちらの人間ではないので、あまり断定的なことは言えないんですが……。正直分からないです。ただ感覚的なことを言わせていただくと、古代からの流れで考えますと、古・高松湾の方本も重要な場所だったと思うんですけれども、国府を中心にした経済圏ということを考えますと、便補の保が国府を中心に高松平野の西側にかなり集中してあるということが重要ではないかと思

ます。それから野原から真っ直ぐ南に抜けるルートが南海道に接する地点に一宮が鎮座しているということを考えますと、国衙を軸に国分寺、一宮を、南海道を通じて取り込んだ古代的な地域権にもとづく流通網を中世前期の段階では色濃く引きずっているのかなというふうにし少し思ったことはあるんですけども、なぜ方本じゃないのかということは、よく分かりません。

佐藤 ありがとうございます。あんまり意味のある議論かどうか分かりませんが、松本さんにも同じ質問を……。

松本 あの、考古学の方からいうとほとんど見えてこない、というのが正直なところですよ。

佐藤 その辺のところは、もう少し考えていかなければいけないのかなと思います。ところで松本さんは野原を「二次的集散地」というふうにしてはいますが、そもそも「集散地」概念を提示された伊藤さんが来てますので、この瓦器碗の在り方、あるいは評価の仕方という部分で、先程コメントもされましたが、もう少し具体的にこうではないのかというご意見ありますか。

伊藤 これは考古学の遺物の検討がもつ宿命とでも言えるんだと思うんですが、まず出てきたものが、佐藤重聖さんとも言われたように、イコール流通とは言えない訳でありまして、モノが出て来るという時に、そこに最低限モノが来たということは分かる訳ですが、他にもいろいろ考える要素を付け加えないと難しい。松本さんがここを「集散地」とした最大の要因は、量も多いということもさることながら、結構きれいな未使用のものが多かったということが根拠になっています。その辺ももうちょっと方法論的に一締めか二締め必要なのかなと思っています。そういう意味で言うと、野原というのを一つの消費地としてモノが入ってきたということも、否定はし切れないということも一応、考えた上で、今後の議論を展開したらどうかと思います。

佐藤 それはもう少し具体的に言うと、野原庄内での消費とか、石清尾八幡宮とか、そのような意味ですか。

伊藤 そういうことですね。だから野原庄で使うためにモノが入ってきていると。そこから拡散するかどうかというのは、また違うかもしれない。これはモノ資料の宿命だと思いますので、あとはどれだけ理論化できるかということだと思います。

佐藤 ありがとうございます。まあ、そのような意味でも実際の資料とイメージの間に緊張関係をもちながら考えていくんだらうと思いますので、これは後の課題としたいと思います。それから、古・高松湾よりも少し広めになるんですけども、もう一度、『さぬきの道者一円日記』について考えたいと思います。初穂料は先程、銭の話は出ましたが、銭とか米とか豆とか、いろんな物が初穂料として支払われています。ある意味で銭は都市的云々ということにも絡むじゃないかという意見が何人かの方から出ましたけれども、じゃあ銭を見た時のある場所では100文、だいたい100文と書いているんですけども、112文とか120文とか多少ばらつきはあるんですね。それで井上さんは午前中のコメントで非常に面白い話をされたんですけども、もう一度、100文、112文、120文の意味を説明いただけますか。

井上 例えば地元のお祭りでも獅子舞とかやって、ご祝儀が付いてくるんですけど、不思議とお心任せと言いながら、近所で相談して決めているからか、ずらっと同じ金額が並ぶんです。だから100文とか120文とか並ぶというのは、数字に関して恣意性というのはすごくあると思います。120文というのは何かというと、さっき112文は言ったんですけども、96文(=100文)+12文だろうという見通しです。120文というのは、これはちょっと言い過ぎかもしれないが、やはり12の倍数としての意味だろうと思っています。

佐藤 井上さんはこの『一円日記』をかなり関心をもって見ておられるんですが、私ら考古学とか文献史学とは異なった経済史の立場でこういうものを見ようとされていると思うんですね。それで、何かこれを見ていて、こういうところが面白い、あるいは素材として使っていけそうだというようなことはありますか。

井上 多分、米と豆自体は流動性がある。米と豆は食べてもいけるし、いざという時の決済手段として使えます。戦後、めちゃくちゃインフレで貨幣制度が混乱した時に、家の米を盗んで、飲みに行くのにそれで決済していたという近所のおっさんがいましたけれども、ある程度豆とか米というのは流動性というか、決済手段としての最後の切り札として残ることがあります。1565年というのは背景として、京都の方では撰銭令が出されたりして貨幣が混乱する直前なので、現物としての米・豆だけを見るんじゃなくて、ひょっとしたらもうお金だけを使っていたらやばいなという風潮を受けて、決裁手段を可能とさせる現物として取り扱われはじめたと、考えられるわけです。「悪銭」とかいう記載も出てますし、食べるだけの米・豆ではなくて貨幣的流動性という面も視点として入れるべきなんだろうというふうに思います。

佐藤 単純に素人考えで思うのは、これは御師がいっぱい廻って集めてきますよね。集めたものを積んで、伊勢へ帰っていくんですか。

井上 綿貫さんあたりに怒られそうですが、多分、こんなのは宗教やっている人がわざわざ自分で歩いたり換金したり、そんなことは多分していないと思うから、これはもう、現地に誰かいて、実務はやっているはずですよ。中黒などに現地の宿がありましたよね、西浜のどこかにも倉庫があって、そうした拠点に物を集めたのではないのでしょうか。それから、支払上、現地と野原を結ぶのには、債権を確保しておいた上でその収取権をもとに支払った。つまり、モノを集める過程でも為替手形を使用したか、為替まで行かなくても「こんだけあるから頼むよ、送ってきて」というふうに、現地の人同士の信用の上ののってやりとりしたのかもしれない。品物として何が集積されるかは別として、とにかく、野原でかきあつめた品物を、持ち出さなければならない。このとき、伊勢ではなくて、まず大坂の方へ持っていったと思います。伊勢直通ではなくて、大坂の商人に頼んだ。もちろん、最終的には伊勢の方まで価値を移さないといけないんですが、それは大坂の商人と伊勢の商人が介在して、価値移転が行われた。そういうふうに考えます。現物の品は、誰かが汗水たらして運ばなければいけないんですが、支払に関しては、現地と野原、野原と大阪、大阪と伊勢の間を、人間関係だとか為替手形をつないで行っただろうと思います。これは、一方の債権発生が宗教上からきているという意味では、純粋な経済活動ではないけれども、やはり為替手形とか経済システムが介在していたと見るべきなんだろうなと思います。『一円

日記』に「しやくせん（借錢）」と出てくるのは、そういうところを睨みながら、史料不足ですが進められないかなという感じです。少なくとも、そういう視点をもつべきだなと思います。

佐藤 ありがとうございます。今、井上さんの方から「綿貫さんが……」という話が出ましたが、綿貫さんはこの史料から伊勢の御師の活動、まあ経済活動として簡単には割り切れないと思うんですが、どんなふうなことが言えるか、それからその中で岡田大夫は野原中黒里に上陸しているように見えるんですが、そういう意味での野原の役割といったことについて、何かイメージがありましたらお話しいただけますでしょうか。

綿貫 私自身は関東の方を最初やっていて、伊勢の神人が品川の方までやって来ているという話から始めています。関東の方に関しては、正中4年の『坂東道者日記』というクボクラっていう伊勢御師の手代が関東一円を廻って、お札とお土産を配ってそれに対するお礼を集めたという史料があるんですけども、そこでやっぱり帯とか布とかをたくさん配っていたと思うんですが、それに対する対価というか、信者側から何が来るかという、銭とかも勿論あるんですが、永正14年、もう少しこの史料（『道者日記』）よりも古い時期だったと思うんですが馬とか、あと下総の鋳物師集団では鍋とか釜とか、そういうので払っているという、そういう在り方もあるんですね。

あと、もう一つこういう配り帳で、信濃国かそこら辺の廻檀帳、檀那廻りをした帳簿みたいなものも残っているんですが、それも15世紀か16世紀だったと思うんですが、その場合はさっき井上さんがおっしゃったように、ステーションになるような地域の拠点があって、そこに最初品物を送っているみたいです。信濃ではお茶を配るのがすごく多いんですけども、だからそれはどういう御師の生業なのかということにもよってきたり、あるいは地域によって、こういう品物の需用が高いとかということがあるのかもしれないんですけども、何かそういう倉庫的な村の拠点、まあ宿を務めている家があったとすれば、そういうところになるのかなとは思いますが、そういうところに取り敢えず品物を送って、そこから小分けにして持っていくという状況はあったのかなと、私も考えています。

四国でこういう廻檀に関わるようなものが出てきて、ただ関東の場合だと結構御厨の段階、もっと古い時代からの伊勢との関わりがあって、その御厨の経営が立ちいなくなった時に、伊勢神宮がお金を集めるために、宗教を冒涇していると言われるかもしれないんですが、セールスのような形で手代とかそういうのを派遣して、信仰を説きつつお金集めをするという、そういう形ですね。そういう流れがあるんですが、これはむしろ讃岐の近世の伊勢詣でに繋がっていくような流れというか、御厨段階からの繋がりが果たしてあるのかどうか、というのはちょっと前提が分からないので、印象としてはむしろ戦国期に地域の領主を取り込みながら、そこからお金集めをしつつという、そういう状況の中で近世に繋がっていく前提みたいなものと見ていいのかな、と思いました。

佐藤 ありがとうございます。まあこの史料自体、これからいろんな読み込みができるということで、興味がある方は自分なりのイメージを、それから歩いた経路をたどってみるというのも面白いんじゃないかと思うので、いろいろ見てみてください。

(3) 讃岐における野原～宇多津・野原・引田・仁尾

佐藤 続いて「讃岐における野原」ということで、今までは古・高松湾周辺ということでしたが、もう少しエリアを讃岐全体に広げて考えていこうかと思えます。昨日、渋谷さんの話で古・高松湾じゃなくとももう少し視野を広げた時に、備讃海峡ですね、つまりかつて宇高連絡船が繋いでいた岡山と香川の海峡の一番狭い部分ですね、その備讃海峡の東側と西側で何か動きがあるんだというような話が出たと思えますので、さっきの古・高松湾での主導権争いの延長で、今度は備讃海峡の東と西ではどのようなイメージが描けるのでしょうか。

渋谷 備讃海峡の場合には、ヘゲモニー争いということとは少し違うんですけども、それぞれの勢力がどっちを向くかによって、西側を取るか東側を取るかというようなことがあるんじゃないかということを考えています。昨日の発表ではそこまで話せなかったんですけども、特に古い時代の屋島城の場合で言うと、畿内の政権にとって最終のラインであるから、海峡の東側に重きを置いてわざわざ記録にも書いて残り『日本書紀』に採録されたのかなと思えます。

もう一方で、西の方に向かって出ていく時に、海峡の西側というのはすごく大きな意味をもつのかなと。これは宇多津・塩飽諸島を経て備前・備中の方を目がけるような動きになるとは思うんですけども、ちょっと具体的な史料は挙げていないんですけども、後々室町時代に宇多津に細川氏が拠点を置くような形になるんですが、その一つの大きな記念碑的な出来事として白峰合戦というのがあるんですが、その時に細川頼之が宇多津の城に入る訳なんですけれども、細川頼之は阿波を本国にしておりながら中国の管領として山陰にいる山名氏、長門にいる足利直冬と対峙する訳なんですけれども、そういった形で西の方を向いた時に占める位置として宇多津のラインというのが出てくるのではないかと思います。ですので海峡の東と西は、その時の勢力の向いている方向によって重視されてくるようなラインになってくるのではないかと考えます。

それで先程の古・高松湾の話も出しましたが、畿内にいる政権側にとって最終ラインとしての屋島・野原というラインはそのような位置付けにあるのではないかなと。それぞれの政権や地元の勢力がどちらを向くかによって、宇多津のラインが機能してくる場合もあるんじゃないかと考えています。

佐藤 ありがとうございます。簡単に備讃海峡のどちらからどちらへということではなくて、どっちを向くかによって使い分けしているんだということでした。それと石造物の香川県での分布圏というのを見ていくと、中世前半と後半では、備讃海峡の東と西のどちらを境界とするかということがかなり違いがある、という話が松田さんから出たと思うんですが、その辺りを手短にお願します。

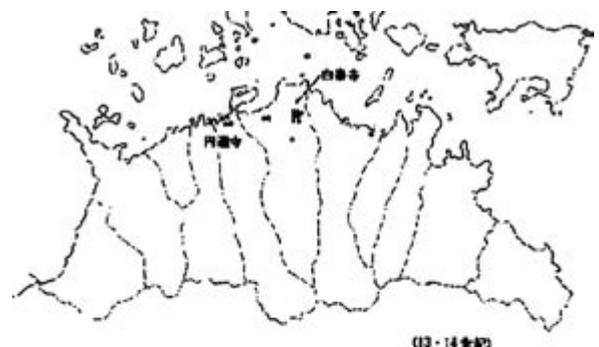
松田 昨日ちょっと十分に説明できなかつたんですけども、簡単に言えば在地の石造物として県内では火山系と天霧系があると。それでその境界線ですが第11・12図を見ていただきたいんですけども、ちょうどその境界線が阿野郡と鶴足郡になってくる訳です。この境界線に第13図の上側の図面を比較してもらいたいんですけども、香川では1%もない花崗岩製の石造物が集中します。こういう坂出・宇多津の中心的な様子が読み取れる訳ですが、もう少し具体的に歴史を追って見ていくと、鎌倉前期・中期は県内にあまり石造物がない時代であったと考えられます。そうした中に鎌倉中期あたりから白峰とその周辺に火山が入ってまいります。またそれと同じ時期に花崗岩の石造物が作られ始めます。そし

てさらに時代が進みまして13世紀後半になりますと、ここに先程佐藤亜聖さんが述べられた十三重塔が作られ、それからやや後に宇多津の円通寺の五輪塔が作られる。この白峰寺の十三塔と円通寺の五輪塔は、まさに大和系の石造物でありまして、私はこれは香川の石工が作っていない、大和系の石工が製作していると考えています。石は瀬戸内海の島の石ですので、その石を使って大和の系統の製作地の方から石造物を作りに来ているということが言えようかと思えます。その次の段階になりまして、その白峰の石造物に天霧系が入ってきます。それは具体的に、白峰寺の花崗岩の十三重塔をまねしまして14世紀に天霧系の石工がここで石造物を作ります。また摩尼輪塔という白峰寺の参道にある石造物を奈良の石造物をまねして天霧系の石工がそこに製品を作ると。善通寺も大和系の石造物をこれもまねて天霧系の石工が石塔を作ります。そいった流れの中で、14世紀以降天霧系がどんどん広がって行って、讃岐の地域を二分化するというような歴史がたどれるのではないかと思います。そういう意味で坂出・宇多津という地域が、香川の石造物の歴史を語る上で欠かせないところになってくる訳です。

時代が進みまして15・16世紀になると、天霧系の石造物がシェアを伸ばしてくるということに関わるんですが、中心地が高松平野の方に移ってきます。その頃の非在地的な花崗岩はどうなっているかというと、第13図の下の図になる訳なんですが、13・14世紀のような白峰周辺の特別な様子というのは認め



第11図 13～14世紀の石造物分布



(13・14世紀)



第12図 15～16世紀の石造物分布



(15・16世紀)

第13図 搬入石造物の分布 (松田作成)

られないです。各海岸線に花崗岩製の石造物が分布しています。しかしながら高松平野という地域は、花崗岩製のみならずその他の石材でもいろんな地域の石が入って来ているという特徴が見て取れます。具体的には、野原と香西には岡山の石灰岩が入って来ていますし、徳島の結晶片岩、そして兵庫の御影石、また島の花崗岩、そして最近、もしかしたら伊予の凝灰岩も入って来ているのではないかということが考えられています。そういう感じで、室町時代の在り方というのは、様々な石造物が流れ込むという地域的な特性というのが高松平野、特に野原・香西地域に認められる、という変化をしてくると思います。

佐藤 ありがとうございます。簡単に言うと、中世前半は石造物の境目つまり両方に向いているのが坂出・宇多津周辺だったのが、中世後半になると高松周辺がそういう場所になってくるということでしょうか。これ自体、非常に面白いデータだと思います。それで多分、野原の求心性も単純に上がっていくのではないと思うんですが、例えば15世紀中葉の『兵庫北関入船納帳』で見た時の讃岐の中での野原、それから16世紀中葉の『一元日記』で見た時の野原というのは、どうでしょうか、どちらかの方が讃岐の中で中心性が高いというような議論というのはできますでしょうか。上野さん、何かご意見ありますか。

上野 中心性ということですか。基本的には東の引田なりが兵庫北関に近いということもあって、そちらは小型船で回数も多くてという傾向があり、西の方はむしろ回数は少なくいけれども大型船でもってという違い自体はあるとは思いますが……。

佐藤 私の聞き方がまずかったんですが、『入船納帳』段階では野原は讃岐の普通の港町ではないかという気もせんことはないんですが、それが15世紀と16世紀では変化があるのかなのか、ということですが……。

上野 そうですね。結局『入船納帳』というのが室町中期段階ですので、その後の戦国期以降ですともう少し宇多津が中心であったところから野原がもう少し中心機能を果たすのかなとは思いますが……。

佐藤 ありがとうございます。そういう流れが仮にあるとして、その結果として生駒氏が讃岐に入ってきて来て引田に寄って宇多津に移って最終的に野原に高松城を造るという動きになるんだと思いますね。じゃあなぜ、宇多津じゃ駄目で野原が良かったのか、ということについては港町としての特徴や空間という部分で、宇多津と野原に違いがあるからなんではないでしょうか。松本さん、何かありますか。

松本 先程、言い忘れたことを言わせようとしていると思うんですが……。今回展示でも復元図を作っていますけれども、海から見た時に高松平野は後背地が非常に広いんですね。そういう後背地の広さが大きな特徴だと思います。宇多津がなぜ駄目だったのかということは非常に難しいんですけども、やはり自然地形の変化の中で港湾機能を維持するというのがなかなか難しくなってきた、宇多津も江戸時代に非常に苦勞して湛甫形式の港を造っていったりするというような動きもありますので、そういうところも大きいのかなと。実際に新たに戦国領主が入った時に、迷走しながらというイメージなんですけれども、やっぱりそれまでのいいところをある意味潰しながら入っていきながら、最終的にはいいとこ

ろと思った広い後背地をもった高松へ入ったというふうに考えられるようなイメージです。

佐藤 ありがとうございます。市村先生その辺りのことについて、なぜ宇多津では駄目だったのか、なぜ野原なのかということについて、どうですか。

市村 一つは自然環境の変化があって、宇多津の湾が随分埋まって行って高松藩の米蔵が造られた時に、あの近くに港が造られますが、中世の港湾というのはかなり海の方にせり出して、相当無理して造ったと思うんですね。戦国段階でも、多分、15世紀に比べて16世紀というのは宇多津が斜陽化しているということが何となく読める。恐らく16世紀というのが厳しい状況であって、この時期に野原の方が浮上してくるだろうと。

あとは宇多津がどちらの方を向いているかということ、先程の渋谷さんの話ともからみますが、宇多津は京都の方を向いていないこともないんですが、備中・備前とりわけ備中の方を見ているんじゃないかと思えますね。瀬戸内海の東西の幹線ルートと、南北を繋ぐルート、これも渋谷さんがおっしゃるとおりなんですけれども、今の瀬戸大橋がかかったルートはまさに宇多津から塩飽を通過して下津井を通過して児島の熊野信仰のメッカを突き抜けていくルートですね。それでそこが中世の中国・四国を結ぶ幹線だろうと思えます。それが時代によって、古代の場合には松山津から塩飽を通過して下津井に抜けて行くというルートで出てきますが、近世になると宇多津ではなく丸亀・多度津になる。ルートはずれることはずれるんですが、基本的には宇多津周辺から下津井、児島の西側を通過して備中というルートは動いてないんじゃないかと思うんです。それに対して野原の方は、直島群島あたりから備前、播磨へ抜ける、そういう海路の基本ルートがあるんじゃないかと思うんですが、恐らくこういう話をしろという一番最後の問題ともからみますので、ちょっとそれは後にします。

ともかく野原の方が東を見るような、山陽道のへりを通って東に向くようなルートが考えられて、直島の港湾施設の材が野原と同じというのも、恐らく野原と直島を一体的に見た方がいいのかなと。そういう関係で捉えていくと、宇多津が塩飽と一体的な関係ですから、同じように野原と直島の関係を見ていくと、どっちを向いているかということが見えてくるんじゃないかと思えます。

(4) 中・東部瀬戸内における讃岐～畿内と備前・備中

佐藤 ありがとうございます。それではもう少し話を広げまして、中・東部瀬戸内、まあ瀬戸内海の東半分の中で、讃岐あるいは備讃海峡、もし可能であれば野原ってどのような位置付けあったのかということ、もう時間もかなり超過していますが、もう少し話をしたいと思います。瀬戸内海における海上交通の中で、備讃海峡や讃岐がどのような位置付けになるのかということですが、これは先程の市村先生の話ともからむんですが、対岸との関係で言うと、瀬戸内海を南北に横断するイメージですよ。

市村 『南海通記』だったと思うんですが、記事の中に「向地（むかいち）」というのが見えるんですね。近世のイメージで、その辺をさし引いて考えなければいけないんですが、関東の場合は東京湾を挟んで房総の側から上総あたりから武蔵・相模の三浦半島辺りに向けて「向地」という訳ですね。それは逆に言えば三浦半島から房総を見ても「向地」な訳です。それで「向地」という認識が一方にあれば、他方からも「向地」という認識があって、双方向的に日常的な交流の範囲があって、それが「向地」が成立

する前提だと思うんです。それが近世の史料ではあるけれども、香川と岡山との間に「向地」という意識があったというのが重要で、海峡はこれは北の世界も同じなんですけれども、津軽海峡が北海道と本州の北を分断するんじゃなくて、繋ぐ世界があるんですが、そういう役割を備讃瀬戸が果たしていて、讃岐と備中・備前を一体的に見た方がいいんじゃないか。そのうち宇多津の方から備中の方へ抜けるルートと、塩飽と宇多津が一体的というのが浄土真宗のお寺（宇多津・西光寺）の縁起なんかで関係が考えられるんですが、直島と野原の場合には港湾施設を施工する時の材料が野原と直島と同じだというのは、やはりそこは、かなり密接な関係があるんだろうということですよ。

同じ備中・備前でも、宇多津から向かっている方向と、野原から向かっている方向は違うということですが、恐らく古くからあって、先程、渋谷さんが言われたような、京都から見た時の直島から野原にかけての範囲と、それから坂出・宇多津方面から縦の線を引いたラインとでは、持っている意味が違うということがあるんじゃないかと思います。それは、讃岐の場合に特徴的なのは、古墳時代に4つの古墳の群集する地域があって、それが西の方から仁尾・観音寺とか詫間とかの辺りと、それから東に来ると宇多津があり、そして野原があり、東の端に行って引田があり、古代からの中心機能があるところとかなり重なってくる。そういう中世だけに限定しない、原始・古代から近世まで、もっと最近まで入れてもいいんですが、そういうスパンで見た時に、結局どこに収まってくるのかというと、一方では今治から尾道に抜ける「しまなみ海道」が出来た。それから瀬戸大橋が出来たというのは、やはり古くからあそこが瀬戸内海を通過する南北ルートと重なってくる。それから鳴門大橋も同じかなと思います。そういうふうに渋谷さんが提起された問題というのは、中世でも十分通用するのではないかと思います。

佐藤 ありがとうございます。横断するルートも備讃海峡を挟んで、東側と西側にあるということでしたね。確認なんですけど東側、つまり野原側から対岸の児島に向かうルートというのは、港湾施設という話でいうと松本さん、もう少し詳しく、いつ頃、どんなふうにルートが確保されたのか。港湾施設だけでなく、野原を起点にして児島の方に渡っていくルートについても……。

松本 それは、市村先生が今おっしゃった通りで、何もコメントはありませんけれども、直島にある積浦遺跡というところで、大きな湾入する地形を遮るような砂堆の前面部で確認された遺跡です。そこで野原、高松駅前で見つかった湊とほぼ同じ時期、11世紀後半から13世紀くらいですけども、海岸線に沿って板石を並べて湊にしています。そこで並べられた石というのが非常に特徴的な石で、赤く発色した安山岩の板石であり、おそらくは石清尾山で採れたものであろうと。おそらくは備讃海峡の航路を整備するのが、野原側が起点となってそういうふうになっていったのかなと思います。時期的にも野原と同時期のものです。

佐藤 もうちょっと時代幅を広くとって遡らせていって、古墳時代からの流れでもいいんですが、考古資料で、野原周辺を起点にして児島・備前方向との繋がり。あるいは平氏政権が福原の方に行く動きがあるということでしたが、考古資料でそのような2方向の動きというものは指摘できるんですか。

松本 基本的には弥生時代、あるいは旧石器時代からではないですけども、追いかけてはいけると思います。具体的には、例えば弥生後期段階で高松平野の土器と播磨の土器との共通性とか、一部、その後も積石塚が見られるといった共通性がありますので、そういうのは確実に弥生時代から追っていき

かなということです。

佐藤 ありがとうございます。では、文献史料あるいは宗教史から見て、そういう野原を起点にして対岸の方、あるいは播磨の方との繋がりが見られるような動きというのは、上野さん、何かありますでしょうか。

上野 それは、崇徳上皇（の配流）とか、そういう話ですか。どうなんでしょうかね。直島説というのは確かに松山津に入る前か後に、というような動きがあるとかないとか、ちょっと微妙なところがあって、私なんかは直島説というのはあまり肯定していませんので……。実際には、そういう計画自体はまああったんでしょうが、現実的にはそこまでされないというか、まあ結局そういう話が出てくること自体、直島と野原周辺との繋がりということが言えるのかな、とは思っています。

佐藤 それから何か、宥範が畿内から来た……。

上野 そうですね。宥範という、善通寺を中興したお坊さんがいて、昨日もちょっとその話をしたんですけども、彼は高野山にいて、さらに東北とかに修行してきて帰ってくるんですけども、その際に西宮まで出て、そこからこちら讃岐に帰国して来ると。で、その際に野原庄の八輪島観音堂に着いたということで、西宮から直接、野原へのルートで入って来ているということは、かなり言えるんじゃないかと思えますので、当時そういうルートがあったのかなということは言えると思えます。

佐藤 宥範が来たのは、いつ頃でしたっけ。

上野 そうですね、鎌倉のかなり遅い時期だと思います。

佐藤 伊藤さん、医学書の存在とかも含めて、鎌倉の後半という時期に、そういう畿内と直に繋がってくる拠点みたいな位置付けというのは珍しいのではないかということ、何か前に話されていたような気がするんですが……。

伊藤 宗教者に関わらず、ネットワークそのものは非常に広範囲にわたり歩いているものでありまして、中世後期の例になってきますけれども、伊勢御師の参宮道者が讃岐国の道者を預かる時に、堺を經由していると。基本を飛び越えてやって来るというのはあり得ることで、鎌倉の宥範なんかの関係も石造物のあり方ともリンクしてきて面白いかなと思います。

佐藤 ありがとうございます。まあ、地元の間で風呂敷を広げられるのはこれくらいまでなので、会場におられるもう何人かの方で、瀬戸内の中で讃岐あるいは野原というものがどんな位置付けができるのかということ、本当にイメージの話をお聞きしたいと思います。それでは鈴木康之さん。鈴木さんは草戸千軒町遺跡を掘っておられまして、備後、瀬戸内北岸の方から見た時に、どんな見方ができるのかというお話をお願いできないでしょうか。

鈴木 はい。野原を中心にしてみてということが、なかなか難しいんですが、先程のお話し、例えば今、福山と多度津がフェリーで繋がっていますけれども、そういった多度津とか宇多津の方からですね、備後の方が繋がるという話がありました、古代からいろんな動きがあると思うんですけども。

今、思い付いたのは笠岡諸島に大飛島という祭祀遺跡があって奈良三彩の壺が出た島がありますけれども、あそこは古代の律令政府が内海を航行する時の祭祀の場として使用していたということが言われています。それから私も少し関わったんですが、福山市内なんですけれども走島の沖に宇治島という島がありまして、そこも古代の奈良三彩の祭事が出て、そこを調査してなぜ宇治島が重要で奈良三彩があるのか、分からなかったんですけども、最近そういうような、笠岡諸島沿いに四国と備中・備後の間を繋ぐルートが古代から確認できますので、そういうルートが一つ、重要なルートとしてあったということですね。奈良時代の話ですけども、そういうふうに祭祀遺跡を理解できるかなということがあります。

それから、これは全く草戸に関しての話なんですけども、まだいろんなところに出てなくて、私も断片的に使っているだけなんですけども、草戸の後半期、15世紀から16世紀にかけて、備後渡辺氏という領主が出てきて、集落の南部の方に大きな方形の居館を造る領主が出てきますけれども、その渡辺氏というのは山名氏の被官で、山名惟豊の配下で応仁・文明の乱を戦うんです。それで山名惟豊は応仁・文明の乱で西軍の側に付いて、負けて全部領地がなくなってしまって、渡辺氏の瀬戸内海の方に逃げてくるんです。草戸が拠点の領主だと思うんですけども、ちょっと怪しい史料で今まで研究者が評価していない史料なんですけども、渡辺氏が領地をなくしてしまったんで、まず笠岡に逃げて、笠岡の次に塩飽に行き、それから宇多津に行き、それから弓削に行き、そこでも隠れ切れなくなって詫びを入れてまた草戸に戻って来て、また安堵してもらおうという話が載っています。まあどこまで本当か、分からないんですけども。どちらにしてもそういう範囲が、渡辺氏にとってもネットワークをもって動ける範囲であったと、いうふうに思うんで、先程からのお話しの材料になるか思います。どちらかというと備中・備後の方は、野原というよりも宇多津とか多度津とかの方との結び付きが強かったのかなと、思っております。

佐藤 ありがとうございます。それじゃあ、畿内というか大阪の方から見た時に、どんなのかというところを綿貫さん、お願いできますか。

綿貫 帰りの時間とかもあって、言い放しで逃げちゃうかもしれないんですが、昨日・今日とお話しを伺っていて、特に出てこなかったのですが、大阪そのものでお話しできることはあまりないんですが、紀伊半島のこととかを追っていて、出なかったお話しとしては熊野信仰の話とかあったんですが、ただし熊野別当の配下に熊野海賊という集団がいて、これは治承・寿永の内乱の時、鎌倉幕府誕生の前の段階で、南海道を平氏が要略したことに抗議して、阿波の方まで攻め込んでくるという時期があります。で海の方に出てくる必然性というものはあって、紀の国の場合は、さっき後背地の話がありましたが、讃岐は結構広大な平野というのがあるんですが、紀伊半島なんかの場合は、やはり山林資源、もしくは海に出ていくしかないという、海に出る必然性みたいなものですね。

そういうことで四国では阿波国を荒らす。それから墨俣の方にも行く。最初は伊勢・志摩を荒らすということがあったと思うんですけども。そういうことで、人の動きからすると、信仰は勿論伴っていたとは思いますが、そういう資源がないために他の地域へ行って、それで特に阿波に侵攻した時には食

糧を奪ってくるということ。さらに、これはデマだったようですけども、義経が屋島に渡る時も、且蔵の勢力が支援しているんだという話があった。そういうデマが出てくる背景というか、その後もやはり昨日も石造物の話で紀州の海南が出てきたんですけども、海南のあたりの廻船商人たちがやはり瀬戸内海を通して、薩摩まで行っているんですよ。そんなことがあるので、非常にそういう紀伊半島との繋がり、まあ阿波は熊野信仰という意味では吉野川流域とかは結構確認できるんですけども、そういうことで人の繋がりには信仰だけではないので、中世の信仰というのは、私はかなり商売を担っていると思っていますが、そんなふうなことがあろうかなというふうに感じました。

それと後、もう一つは、道の問題とかもあったんですけども、沿岸部の土地の安定性がいつ確保されたのかという問題があって、さっき海に出ていく必然性とかを話したんですけども、海を利用する必然性というか、船を利用せざるを得ないというか、あまり現代人であればそこは危ないだとか、ここは利用できるだろうとか、そういう目で見ちゃうんですが、沿岸部というのは浮島状態だった時期がかなり長いんじゃないかなと。幕末から近代にかけての埋め立てとかで、かなり地形が変わっているということがあって、道があるから人が歩くのかというと、逆に人が歩いたからそこが通路的なものになっていった。そういったことも含めて、沿岸部の利用状況ということを見ていかなければいけないな、ということを感じます。

■ 4 野原とは、どんな場所だったのか

佐藤 ありがとうございます。もう、時間もかなり超過してしましまして、まとめにならないようなまとめに入ろうかと思えます。野原とは、どんな場所だったのかということをごすね、考えたいと思います。一応、今までのいろんな方のお話して言うと、野原では中世では3つの段階を想定しているのではないかと思います。一つは、12世紀から13世紀前半くらいですね。それから13世紀後半から15世紀くらい。そして上野さんが言われましたが、もう少し中心性が高まってくるという意味で、16世紀。この3つの時期が、野原の中でいろんな役割が変わっていく、変わり目の時期だというふうに、どうも言えるんじゃないかという気がしてきたんですが、そういったことを前提にした上で、結局、野原はどのような「場」なのかということをごすね、感想混じりに、まずはコメンテーターの方たちにお話しただければと思うんですが。大嶋さんから順番にお願いいたします。

(1) コメンテーターから

大嶋 発掘調査例が、野原の北部に固まっているという点が、ちょっと残念なんですけども、一応、12世紀から13世紀前半という段階では、港湾施設があるだけで集落がないという状況。で13世紀に入りますと浜ノ町遺跡なり、そういった場所で集落が徐々に出てくると。ただしそれらは、条里地割から延伸した地割をもたない、独立したような地形上に集落がいくつか点在しているということが想定され、16世紀になってそれらがまとまりをもつような感じになっていったというふうに感じました。

井上 何か、無茶苦茶なことばかり言ってるから、信用してくれるかどうか分かりませんが。昨日・今日と聞きまして、自分なりにすっきりしてきました。12世紀の第1段階については、まだまだ(土地が)安定してないから、港町としての発展というのはなかったのかなと。しかし、段々安定してくるこ

とによって、少なくとも相対的な関係では、屋島と比べても、港として野原が使われ易くなってきたのかなと思います。

それから、さっきからずっと議論してますけど、どうして生駒がここを選んだかについては、経済的な合理性という面だけ、つまり備讃のこっちとあっちを結んで重要な位置であるというふうな話ばかりしてますけど、経済的合理性にこだわらなくてもいいのではないのでしょうか。背景としてここが選ばれる理由があったということが分かったら、僕は納得できるわけです。例えば、古代に、桓武天皇が長岡京を短期間のうちに棄てて、あえて平安京を造ってしまった。都を短期間で切り替えてしまったというのは、必ずしも経済的な合理性が理由ではないといわれています。天皇は兄弟を殺してしまい、怨霊にさいなまれ、悩んで悩んで、もうこんな所にはおれんわという、経済的合理性とは全く無関係な理由で移っているわけなんで……。ここからは、またでたらめな話が始まったと思われるかも知れんけども、生駒がここを選んだのは、彼はどこかよそから来てですね。引田や宇多津へ行ってみたり、いろいろ別の場所を当たってみても、うまくいかない。昔からの港町には在地の人間がいて、そこから税金も取り立てなければいけないし、恨まれるわけじゃないですか。やっぱり何もしがらみのないところで新しく港町の建設を始めたいとか、新しい町を築きたいなど普通に思ったのではないか。次善の策として、経済上の最善の選択ではなかったけども、現地で信用できる人が少なくて寂しい生駒が、やむなくここを選択したのではないかと、全然史料的根拠はないですけども、そう思い、納得しました。

佐藤 亜 私の方は、先程佐藤さんが3つの段階と言ったものを考古資料等で見えていきますと、やはり11世紀から13世紀の前半というのは、形成期的なもの。これは古代的なものをかなり引きずっているのではないかなと思うんですけど、非常に流通の構造等も含めて不安定な背景をもって出来ているのかなと思っています。で、それが13世紀から14世紀にかけては、一つの完成した形というか、ここで流通に関わる商人の自立など、本当の意味で中世的な形が確立するのかなというふうに思います。

その後、中世後期は無量寿院の問題も含めまして、先程、上野さんが律宗寺院化というお話しをされたと思うんですが、そういった方向性をもつならば、无量寿院を地域のコアとする都市形成という印象を少し受けまして、近世の城下町への胎動を含んだ、そういう時期にあたるのかなという印象を受けました。

伊藤 野原というのにこだわらず、古・高松湾とか、もうちょっとだけ広いエリアを見ていった時に、古・高松湾プラス周辺の重要度というのは、恐らく時代によって多少方本に行ったりすることはあるんでしょうけども、一定してこのエリアの重要性というのは保たれていたというふうに見てもいいのではないかなと思います。それが当然、人の繋がりの中で形成されてきたものだと思うんですけども、ただ、今のところ見えてきているのが、「受け身」としての高松湾というか、近畿からもそうですし、備中・備前からの影響力もそうなんですけども、「受け手」としての古・高松湾は非常にはっきりしてきたと思うんですけど、じゃあ高松から発信するものはなかったのかと、いう部分が今後検討していく必要があるのかなと。冒頭の方でも出たんですけども、南部四国方面との関係も含めてですね、やっていくと。もしその受容的なあり方が、現在も引きずられているのであれば、それをもう少し改善していくというのも、一つの手かなというふうな気がいたします。

佐藤 ありがとうございます。市村先生に行く前に、もうちょっと何人か聞きますので。伊藤さん、最後

に一つだけ。都市かどうかというのは不毛だということでしたが、浜ノ町遺跡なんかを含めて、野原をどういう場と見るのかということ、もう一言お願いします。

伊藤 要するに古・高松湾全体として、都市性を帯びていたということが評価できるのではないかな。ですから、野原という一つの在所を取って、そこが都市なのかどうかということも言ってもあまり意味がない。ただ、全体として見た時に、モノが入って来て、恐らく出ていっているでしょうから、そういう意味で、そのエリア全体として都市性をもっているという評価でいいんじゃないかと思います。

佐藤 ありがとうございます。じゃあ、市村先生に行く前に、今度は報告者のコメントをいただきましたと思うのですが、松田さん、野原とはどんな場所だったのかということ……。

松田 まあ、私の方からは石造物なんですけど、石造物から見た状態では、東と西の石造物の境界が絶えずそこにあったと。東の様子も分かり、西の様子も分かりと。さらに中世後半になって、対岸の岡山とか様々なところから来るということで、かなり情報が入って来る場ではなかったかというイメージもっております。

渋谷 私はどちらかというと、野原というよりも伊藤さんのおっしゃっていたように、古・高松湾ですね。それが古墳時代以来、大きなポイントになっていて、それが時の政権によってどちらを向くかという時に非常に重要なポイントであったと。で、その中において、古・高松湾の世界の中で野原がどうなっていったのかということが重要なんじゃないかなと思います。やっぱり今回のシンポジウムのテーマで、野原から高松への連続性と断絶性を考えるといった時に、(今回のシンポでは)連続性についてはかなり細かいデータを挙げられて、何となく見えてきたと思うんですけど、そこで井上さんが言うように何で生駒が入って来たのかという問題も、これからもう少し、今回は近世史からの提言というものはあまりなかったんですけども、そういった方面も含めながら、高松という町がどうやって造られていったかが分かればいいのかと思います。

上野 結構、今までの中世の文献の方では、港町っていうイメージが、割に仁尾のイメージなんかが強くて、浦代官を細川が置いて、かなり強固な支配をしているというイメージがあって、守護領化しているというような流れなんか結構、イメージされていて、そういうのを当てはめていくと、野原というのはやっぱりちょっと特異なというか、それに当てはまらないような事例というのがあるんだなということが、他の国ではそういうことが指摘されていましたが、讃岐国でもやはり、そういう港町をあまり一括りで論じるのではなくて、もう少しきちんと個別に見ていかなければいけないのかな、という感想はもちました。『兵庫北関入船納帳』という、非常に優れた史料があるものですから、それに野原は出てきますけれども、どうしてもそれに引っ張られて、宇多津に比べると大したことはないんじゃないかという印象を、私なんか最初、そこから入ってしまっているんですけど、かなり戦国期以降、『兵庫北関入船納帳』の以降の段階だと成熟した港町になってきているのかなと、少しこのシンポジウムを通じてかなり明らかになったのかな、という印象は受けました。

松本 あんまりコメントはないんですけども、これが終わりましたら、展示の方をご覧いただければとい

うふうに思います。展示を組み立てながら、全然去年展示の準備の調査にタッチできていないまま、いきなり担当になってあわあわしたんですけども、展示を組み立てる中で中世野原のにぎわいといいながら、お見せする資料がほとんどないという、これでよくシンポジウムが出来上がったなというところなんですけど。『入船納帳』にしても、あまり大したものがないということで、今、見たくない言葉が「野原」なんですけど……。

乗松 私が高松城跡下層の中世遺構と浜ノ町遺跡という野原沿岸部の中世遺跡の発掘調査を担当しました。特に浜ノ町遺跡では、私の乏しい経験では見たことも触れたこともないモノがたくさんあり、調べていくうちにそれらの大半が外部から持ち込まれたものであり、また、それまでの高松平野の集落ではほとんど見られない「先進的な」ものであることが分かってきました。そういうところから、瀬戸内海を介した高松平野と外部との結節点、そしてモノや情報が交換される場として、野原の港町のイメージをなんとなく描いてきました。今回のシンポジウムでは、松本さんをはじめとした方々が細かな地形の分析や周辺地域の様相を含めて検討されており、その結果を拝聴すると、私自身、これまでのイメージをより具体的なものとして理解できるようになったかな、と思っています。

みなさんの議論を拝聴して印象に残ったのは土器からみた流通についてです。松本さんの発表で示された瓦器碗の動きは、佐藤亜聖さんのおっしゃるように流通の一側面が現れているものだと思います。その一側面からの見方を解消するためには、すべてのモノは不可能であるとしても、瓦器碗以外の土器や、土器以外のモノといった複数種類のモノの動きも検討する必要があるように思います。今回の発表で言えば、松田さんのテーマである石造物は出所である生産地がはっきりしているわけだから、その動きを例えば土器の動きと比べてみることも大事なのかと思います。そういった作業を繰り返して、モノの流通のレイヤーを重ねていくことで、集落や交換の場ごとの性格がよりイメージできるようになっていくのではないのでしょうか。例えば、佐藤竜馬さんから松本さんや佐藤亜聖さんへの質問にあった、瓦器碗の入ってくるのが方本ではなくて野原であることの背景についても、考古学的にアプローチできる余地はあるように思えるのです。

また、私に与えられた「漁撈集団と港町」のテーマでは、出土遺物だけではなく、『兵庫北関入船納帳』などの史料の検討も含めて憶測に近いことを考えてみました。野原は交換の場であるだけではなく、漁撈や二次加工も行っていると見っていますが、それは伊藤さんが安濃津を例に挙げておっしゃったように、初めから「港町」の枠を当てはめると見えなくなりがちな様々な要素の複合という視点で捉えることができるかと思います。また、仁尾との対比のなかで野原の漁撈集団を評価しましたが、これは現在でも仁尾の秋祭りの中で行われている蔦島での行事を見学したことがイメージの構築に役立ちました。こういった行事は、必ずしも時間軸上に位置づけられる歴史資料とは言えないかもしれませんが、それでもかつての何かをどこかに残している可能性を持っていると見れば、過去の復元の手がかりにはなり得ると思います。その点では、現地形の踏査から旧地形を復元する作業と同じで、実際の資料を見て歩くことで得られるものは大きいと感じました。個人的な今後の課題は、もう少し広い範囲を対象に検討を行って、漁撈集団の様々なあり方を考えてみたいと思います。そこから再度野原を眺めてみると、また違ったものが見えてくるのではないかと。

佐藤 いろいろ課題があって、これからも取り組んでいってもらいたいな、と思います。最後に市村先生にいく前に、会場に千葉の柴田龍司さんから、高松城に向かってという部分でも構いませんし、港町と

いう観点でも結構ですので、ぜひご意見や感想をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

柴田 千葉から来ました柴田といいます。私は関東の方で中世のお城をやっているんですけど、海城、まあ今回の佐藤さんは水城という言葉が使われていますが、その海城というものに興味をもってまして、最近調査しているんですけども。ただ海城って一言で言いますと、一般の方というのは能島城だとか来島城のような、村上水軍の海賊城をイメージされる方が多いと思うんですけども、私の海城の捉え方というのは、基本的に城の中心部分が海に面しているから海城ってということで、そういう立場でいきますと都道府県では北は北海道から南は沖縄まで、全部あるという形になります。

そういう意味での海城なんですけども、まあ、海城の機能というのは、よく海関だとか、あとランドマーク的な機能をいろいろ云々されているんですけども、私自身は海城の機能というのは本質的には港、あるいは港町、どうして港町を挙げたかといいますと、軍事的な港だけを押さえる海城というのは少数ですがあることはあるんで、一応そういうものは軍港を押さえるための海城。あとは港町イコール城下町になってしまうんですけども、長期間支配あるいは守るための軍事施設というものを海城というふうに捉えています。ですから讃岐の場合でいきますと、高松城ですと大きくは讃岐一国のための防衛、小さく見ても高松の城下町と港を守るための軍事施設だという認識になると思われま。

ちなみに讃岐の中世の海城って言いますと、例えば今日佐藤さんの発表にも使われていましたが、香西の藤尾城だとか塩飽の本島の笠島城だとか引田城だとか、そういうものが讃岐における中世の海城だと思われるんですけども、近世に入りまして豊臣系の大名ですが、仙石氏だとか生駒氏というのが最初にどういうわけだか引田城に入る。それはまあ、取り敢えずなんでしょうけども、次に両者とも宇多津の聖通寺山城に入って、生駒はご存じのように高松城に入っていくんですけども、結局こう見ていきますと豊臣系大名にとって、讃岐支配の要ってというのが引田を含めて全部港をもつ海城にあるわけですから、海上交通の掌握、あるいは海上の交易でもいいんですけども、その掌握が讃岐支配にとって非常に重要視されていたということが、海城を居城にするということのでいえるんじゃないかと思います。

もう一つ、先程からも話題になっていたんですけども、高松城というのは今まで何もなかったところに突然できた。で、中世からの継続性が全然なかった場所だということで、これは冗談半分だと思うんですけど、日本三大海城あるいは日本三大水城というのは、時々城郭の本に出てくるんですけど、残念ながら出典がよく分からないんですけど三大海城の場合に、高松城と三重の津城が入ってきます。で、もう一つは今治城であったり、大分の中津城であったりするんですけど、共通するのは何もないところに突然、近世城郭が出来たというというのが、三大水城の一番のメルクマールになるような……。そういう意味では高松城はそういう理解のされ方をされてきたんですが、当然、昨日・今日の発表討論で完全に通説が否定されたというのは明らかになったと思います。ただ、先程渋谷さんですか、ちょっと指摘されたんですが、当然継続性というのが今まで分かってなかったのが明らかになったのは、それはそれですごい評価なんですけども、もう一つはやはり断絶性というんですか、中世と近世の、それもやはりあるのではないかと。今まで通説として断絶性を強調されていたんですけども、でもよく考えてみると、具体的にどういうところが断絶性があるのかということは、渋谷さんの言葉で分かりましたけども近世史の立場での参加がなかったということで、具体化されていないと思うんですね。

一つ、私なりの解答としては、なぜ野原に高松城が造られたのかということは、近世の城は別に海城に限らず城と城下町が一体化したものでなければならぬ。ですから宇多津に造ろうか造るまいかとい

う生駒氏も悩んだとは思いますが、そういう城下町の一体性を考えた上でどういう順番になったのかは分からないけども、野原の地が選ばれたのではないかなと思います。ただそれは私自身、思いつきの世界なので、その辺をもう少し中世との断絶性というものを、今後研究を深めていく必要があるんじゃないかというふうに思いました。

佐藤 どうもありがとうございました。それでは最後に市村先生から、野原とは、あるいは古・高松湾でも結構ですがどんな場だったのかお話しただければと思います。

市村 まとめというより、感想めいたことを述べたいと思います。松田さんが明らかにされた石造物の流通ですね。東西の分布の中で、最初は宇多津・坂出あたりがセンターになっていて、次が境目あたりでセンターになっているのが野原周辺であると。そのことが明らかになったのが大きな成果だと思いますね。それで、東側の方が火山系の石造物の分布域で、それを頑なに守り続けているというのが讃岐の特徴だと思います。古墳時代に大和王権の傘下に入っても積石塚など、まだ独自性を保っている。讃岐というのは、伝統的に在地性の強い、在地の伝統を残すところだなあという気がします。

そういうことを踏まえた上で、野原などを見ていく必要があるんですが、それと同時にもう少し広げた場合に、渋谷さんが備讃海峡で線引きしたあたりで、そこから西の方を京都を含めて見た時に、どのような図式が出てくるのかなあというのがあるんです。これまでは、渋谷さんが昨日ご報告になったレジュメの中に空中写真が出ておまして、これを見るとすごくよく分かりやすいので、ご覧いただきたいと思います。去年、伊藤さんが中心になって三重でおやりになった中世都市研究会の大会の時に、問題になったんですけど、伊勢湾はこれは関東から海運が密接に繋がっていて、伊勢湾に入った船が安濃津の方から陸揚げされて京都の方に向かう、いわば東の玄関口という位置付けをよくされます。それから北の方が、福井県の小浜と敦賀、この二つが京都に入っていく時の北陸方面あるいは山陰方面から来た船が、ここで着岸して、それで陸揚げされた荷物が琵琶湖を辿って大津もしくは坂本あたりから京都に向かう。で、北と東からの方からの出入り口については説明されたんですが、西の方はどうかという時に、大阪湾はよく言われるんです。当時の言い方でいうと大物浦で、その大物浦の広がりの中のどの辺まで押さえているのかなあというところが、茫漠として見えてこないわけです。それで、兵庫と堺というのがその時に大阪湾に入る入口として根拠になってくるのは確かで、これは中国の『日本一鑑』という書物がありますが、それによると大型の船が入れるのは兵庫と堺までで、それから先は船を乗り換えないと入れないんだと。そういう意味では、兵庫と堺というのは合理的なところに出来た、国家的な港湾都市だろうと思うんですね。

じゃあそこまでいいのかというと、それだけだと畿内を見通す時にちょっと見えないだろうと思うんです。昨日、渋谷さんが言われた、備讃瀬戸あたりで線引きできるんじゃないかということ。京都から見た場合の西の第1関門だと思うんです。そこで一区切りしてみたらどうかなと思ってます。で、渋谷さんが淡路島をその中に入れて、4区分されているんですが、私はむしろ淡路島は小区分で、備讃瀬戸を京都を取り巻く内海の一番外側と見た場合に、伊勢湾、それから若狭湾、敦賀湾という海域世界と同じようなレベルで見ることができるとこの範囲かなと思うんですね。それで見ていきますと、吉野川流域河口部から対岸の紀ノ川というのが向かい側でセットでいいと思うんですけど、さっきの綿貫さんのお話しでは阿波というのを一括して使われていましたけども、阿波でも実はかなり地域差がありまして、吉野川流域より南側と北の方では全く違った地域性をもっています。全く山だらけの、山だ



第14図 野原、讃岐、瀬戸内、そして西日本

らけという表現は変な表現になりますので、山が圧倒的な面積を占めているというところは阿波の中でも中部から南に限定されるわけです。それ以外の阿波は、吉野川の下流域は必ずしも山ではないわけです。こういう地域性を踏まえて、阿波の中部、それから紀ノ川の河口のあたりまで含めた瀬戸内海の海域に捉えて、備讃瀬戸から大物までをまとめたところを一つの海域に捉えて、そこで京都と讃岐の独自性の緊張関係みたいなものを見るような視点で見ていくと、また別の見方が出るんじゃないかと思えます。

讃岐が古代から、一面では大和王権がそこに古墳を造るのを認めてそこを押さえようという、そういう強い意志をもって入って来ながらも、それでもなお讃岐が独自性を発揮したというのは、石造遺物の問題なんかでもかなり個性が出て、古い形態をとどめながらあくまでもそれを続かせるというのは、地域性というか風土というか、そういう問題ですね。そういう地域や風土を生み出した讃岐の代表選手の野原、そして古・高松湾というのを見るような見方で見ていくと、京都を射程に入れながらも、やはり独自性というのが見えるんじゃないかと思うんですね。

そもそも今度のシンポジウムは、伊藤さんが中心になっておやりになった去年の中世都市研究会と同じような活動で、讃岐の独自性を全国に情報発信してみようかと。讃岐からの視点で、むしろ京都を相対化してみようと、そういう研究をしてみたいということで始められたわけです。そういう面では、相対化するためには、相対化する相手を見据えておかないと見えませんし、まず讃岐の独自性をどこまで追求できるのか押さえて、それで京都をどう相対化できるのかというふうにやっていただけると、大変これは展望が開けるんじゃないかな、と思いました。大雑把で雑駁な感想は、以上です。

片桐 ありがとうございます。まあ昨日・今日とシンポジウム「港町の原像」ということで長時間、討論も最後のところは1時間以上超過して、昨日・今日の発表者の方で討論をしてきました。いろんなシンポジウムの中でいろんな視点で、それぞれの方が野原というところに焦点を当て、また広い地域、畿内を含めた広い地域で、いろんな視点で見つめ直して、四国、香川県以外に発信していこうというシンポジウムだったかと思えます。ただ、ある程度一方通行的なところというのは少しあったかと思うんですけど、こういうシンポジウムが続けばいいかなと思っています。我々はまずイメージとかですね、い

ろんな視点で理屈をこねようかということでのシンポジウムを進めたかと思しますので、こういうシンポジウムが今後も続けばいいのかなと思います。昨日・今日と長時間、もう大分4時も過ぎまして、残っていただいた方、参加していただいた方、ありがとうございました。それと発表者、コメントを発表された方、ありがとうございました。これでシンポジウム「港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－」を終わりたいと思います。どうも今日は、ありがとうございました。

Ⅲ. シンポジウム後の中世港町研究に寄せて

シンポジウム終了後、中世の港町研究にいくつかの注目すべき成果が提示された。これらの成果は、我々のシンポジウムで示し得なかった視点や知見を多く含んでいる。そこで、我々の今後の課題を確認する意味で、これらの成果について紹介と若干のコメントを記しておく。

■ 1 港湾をともなう守護所・戦国期城下町の総合的研究－北陸を中心に－（2008年3月）

①放生津（越中）・小浜（若狭）・直江津（越後）についての地域研究者による景観復元作業という各論と、②それらを含めた北陸地方の港町における流通関係者の存立構造や諸勢力の関わり、さらに微地形への適応過程を論じた総論、からなる。

①には常に資料的制約が問題となるが、場にこだわった具体的な議論の深化には欠かせない作業であり、現段階での研究の到達点として高く評価されるべき内容をもっている。日本海側の港町は、讃岐や瀬戸内の港町に比して基盤となる自然地形が大きくダイナミックであり、砂堆や潟湖への適応過程が異なることが予想される。例えば讃岐の港町は、潟湖が小規模なため中世前半にはかなり埋没が進み、砂堆前面に港湾施設を置かざるを得ない（あるいは置くことを許容する自然条件が存在した）事例が多く見られるが、これは北陸とは大きく異なることが指摘できる。瀬戸内と日本海では、砂堆の利用のされ方に違った発想があったことを窺わせるのであり、そのような地域間の比較が今後必要になってこよう。また、放生津の広大な潟湖（放生津潟）の存在は、野原と古・高松湾との関係を想起させるが、シンポでの伊藤氏の古・高松湾の都市性への言及（78頁参照）を踏まえると、放生津潟全体を視野に入れた場の役割が検討課題として挙げられよう。

なお、②で山村亜希氏が指摘する「港町による水辺の独占」という志向と、武家権力による「背後の山麓部の都市化」への志向が、どのような背景で生じた現象なのかは、一考を要する課題である。こうした現象は、野原や宇多津・仁尾といった讃岐の主要港町においても指摘できるものであり、政治権力と港町との関わりの普遍的なあり方である可能性をもつからである。一方で港町内部にも政治権力とは異なる「社会的権力」（吉田伸之氏の所論）が存在したことは、綿貫友子氏も指摘しており、その具体的なあり方を明らかにすることが、「水辺の独占」の意味を考えるためには必要であろう。

■ 2 兵庫津の総合的研究－兵庫津研究の最新成果－（2008年7月）

開発事業に伴う兵庫津遺跡の発掘調査の進展を踏まえた総合的研究という点では、野原シンポと共通する背景をもつ。ただし兵庫津では、近世への射程を明確にもつ研究内容となっており、この点はシンポで

の柴田氏の発言（80～81頁）にあるように今後の野原研究の課題としても、参考にしなければならない視点である。また豊富な文献史料を駆使して、大輪田泊・兵庫津の位相が検討されており、これまでの研究の到達点を示すものと評価できよう。

とはいえ、兵庫津研究にもいくつかの課題を指摘できる。まず、考古関係者のアプローチが発掘地点に限定されがちであり、景観復元や地域単位などのトータルイメージの構築が十分とはいえないことが挙げられる。中世の土製煮炊具や陶器、あるいは近世陶磁器の組成から兵庫津を取り巻く流通を考えるという手法は、ここ20年来の考古学研究の常道的手法であるが、兵庫津周辺の摂津・播磨での比較材料を欠くという点で、「地域の中の兵庫津」という視点には及んでいないように見受けられる。

総じて文献史学の立場の方が、地域イメージを積極的に提示しており、考古学の立場からは遺跡論あるいは地域論へのアプローチが弱いように感じられる。こうした傾向は、兵庫津研究にとどまらず近年の考古学研究にしばしば見られる傾向である。

港町も含めた地域（都市・村落）研究は、細分化された歴史学諸分野のそれぞれだけで完結するものではないことには、おそらく異論がないであろう。そのことを踏まえるならば、取り扱う資料が異なるとしても隣接分野の研究との「共通言語」（あるいは共有されるべき土台）をもつことは必要である。文献史学だから地域イメージを作り出せるのではなく、考古学よりも文献史学の方に「共通言語」への志向が強く働いているのではなかろうか。個別の資料解釈にとどまらず、それらの総合として「共通言語」につながっていくイメージ構築への取り組みが、考古学にも求められるのである。

第2表 野原年表(1)

西暦	年号	野原関係事象	周辺地域の事象	文献
667	(天智6)		山田郡に屋島城を築く	日本書紀
903	延喜3	中黒の地に中黒華下宮創祀		讃岐国名勝図会
918	延喜18	石清水八幡宮を野原の地に勧請し、石清尾八幡宮とする		金毘羅参詣名所図会
921	延喜21	槻本神社、朝廷より従五位を授かる		類聚符宣抄
1084~87	応徳年間	白河院の勅旨田を野原庄とする		安楽寿院文書
1114	永久2	藤原宗忠、野原庄における濫妨を白河院に報告		中右記
1143	康治2	野原庄は鳥羽皇后美福門院の皇后宮職領で、年貢の一部を安楽寿院に貢進		安楽寿院文書
		この頃、野原の海浜部に荷揚場が構築される(高松城跡西の丸町地区)		
1183	寿永2		平氏、屋島に拠る(～1185)	平家物語
1185	文治1		屋島の合戦で平氏敗れる	平家物語、吾妻鏡
1225	嘉禄1	天王寺別当の尊性法親王、野原庄を天王寺念仏三昧院に寄進(本家妙法院門跡、領家念仏三昧院)		妙法院文書
1245	寛元3	念仏三昧院公性、野原庄の領家職を太政法印へ譲る		妙法院文書
1275	建治1	岡田丹後守宗重、熊野から若一王子神社を勧請		讃岐国名勝図会
1306	嘉元4・徳治1	野原庄は比叡山横川長史覚守法印の知行ノ僧宥範、西宮から野原庄内の八輪島観音堂前に着岸、無量寿院に滞在する		昭慶院門目録案ノ贈僧正宥範発心求法縁起
1309	延慶2	「讃岐国香東条野原庄 石清尾八幡宮住持法宝也」の経箱		讃岐国名勝図会
1334	建武1	紀伊大伝法院の僧我宝、野原にて医書「伝屍病廿五方」を书写する		続群書類従
1335	建武2		細川定禪、鷺田(坂田)庄で拳兵し、高松郷の舟木頼重を討つ	太平記
1353	文和2	妙法院支配の諸職に野原庄を管掌する念仏三昧院主職が掲げられる		妙法院文書
1363	貞治2	讃岐守護・細川頼之、伊予河野氏の征討時に石清尾八幡宮で戦勝祈願、臨時の祭りを挙げる(右馬頭祭の始まり)		讃岐国名勝図会
1371	応安4	讃岐守護・細川頼之、石清尾八幡宮に禁制		石清尾八幡宮文書
1375	永和1	尾張真福寺の僧祐玄、野原無量寿院で写経		真福寺善本目録
1401	応永8	「讃岐国香東条野原庄 石清尾八幡宮本書写之」の奥書ある大般若経		讃岐国名勝図会
1408	応永15	この年に石清尾八幡宮で書写した奥書ある五部大乘経		讃岐国名勝図会
1412	応永19	野原福成寺・無量寿院、野原西浜極楽寺にて大般若経書写	香西入道常建が年貢170貫文で神護寺領坂田郷の所務代官職を請け負う	北野天満宮一切経ノ御前落居記録
1437	永享9		「讃岐国香東郡大田郷松直権現若一王子」と記される	備前市妙国寺鑿口
1444	文安1	空山、蓮華堂を開創		
1445	文安2	兵庫北関に野原籍船が出入りする		兵庫北関入船納帳
1462	寛正3	妙法院門跡教覚准后、野原庄年貢のうち1万疋の沙汰について日野氏に礼を述べる		妙法院文書
1467~69	応仁年間		宮脇備中守長定、紀州より移住し野原・太田2郷を領有	
1471	文明3	蓮華堂、岡田氏の保護により蓮華寺となる		
1473	文明5		讃岐坂田無量寿院の極官について、大覚寺門跡が奏聞、住持増専を権僧正に任じる旨が出される	親長卿記、讃岐国名勝図会
1481	文明13	野原角之坊に関する熊野の旦那売券		熊野那智大社文書
1492	明応1	讃岐国人香西千寿丸が野原庄の年貢を請け負い、その一部300疋を妙法院に納入		妙法院文書
1493	明応2	香西千寿丸、野原庄年貢の未納分2000疋を妙法院に納入		妙法院文書
1495	明応4		讃岐の国人蜂起し、京都から派遣された牟礼氏を殺害	大乘院寺社雑事記
1508	永正5	野原の小領主たちが香西氏に従い山田郡三谷城を囲む		南海通記

第3表 野原年表(2)

西暦	年号	野原関係事象	周辺地域の事象	文献
1532~54	天文年間	坂田無量寿院、兵火で焼失し野原八輪島に移転、天文の紀銘ある瓦出土(高松城跡西ノ丸地区)		讃岐国名勝図会
1565	永禄8	伊勢御師岡田大夫、野原郷内の旦那を巡る		さぬきの道者一円日記
1570	元亀1	岡田丹後守清高、若一王寺神社の社殿再興(本殿棟札)		讃岐国名勝図会
1571	元亀2	野原郷の小領主たち、香西氏とともに備前児島へ侵攻、敗れる		南海通記
1575	天正3		香西氏、香西浦に新たな本拠として藤尾城を建設(～1577)	南海通記
1579	天正7		佐料城から藤尾城下に香西氏配下の小領主たち移転	南海通記
1582	天正10		長宗我部元親、香西・藤尾城を攻め、香西氏を降伏させる	南海通記
1583	天正11	十河存保、野原野潟の勝法寺を三木郡へ移転させる	長宗我部元親、高松郷の喜岡城を攻め、十河存保を京都に敗走させる	興正寺文書／南海通記
1584	天正12		仙石秀久・小西行長、喜岡城を攻めるが陥せず	南海通記
1585	天正13		宇喜多秀家ら屋島から高松郷に上陸し、喜岡城を攻め落とす。仙石秀久、讃岐の領主になり、聖通寺山城に拠る	南海通記
1587	天正15		生駒親正、讃岐に入り引田城次いで聖通寺山城に拠る	南海通記
1588	天正16	生駒親正、野原庄の地に城と城下町を建設し、高松と名付ける／無量寿院、八輪島から西浜へ移転／宝蔵寺は西浜に寺地を与えられる(真行寺)／丸亀東福寺・浄願寺、高松城下に移転		南海通記／讃岐国名勝図会／真行寺文書／御領分中寺々由来